

HABATAKI

はばたき

UNIVERSITY OF SHIZUOKA

52-1 Yada, Suruga-ku Shizuoka-shi Shizuoka-ken 422-8526 Japan

inside NEWS



● CONTENTS ●

オープンキャンパス	1	カリフォルニア大学バークレー校と大学間交流協定を締結	17
県民の日イベント	2	サイエンスフェスティバル	17
2006USフォーラム	3	名誉教授の称号授与	18
静岡県公立大学法人設立記念事業・セミナー	6	図書館だより	21
第5回国際受容体・シグナリング・薬物作用シンポジウム	7	受賞・研究助成採択	23
第4回日本カテキン学会総会	7	平成19年度科学研究費補助金追加採択	24
奨学金授与	8	教員の人事、客員教授の紹介、ママサイエンス、光と風の夏祭り	24
「朝鮮通信使」を再現	10	夏休みの行事	25
カリフォルニア州学生のための日本語研修プログラム	11	グローバルミュージカル	26
リール政治学院留学体験記	13	教員の著書紹介	27
ニューカッスル大学夏期語学研修に参加して	15	クラブ・サークル紹介、寄稿募集	27
オハイオ州立大学夏期語学研修に参加して	16		

■オープンキャンパス

“見て、聞いて、体感する” 県大の魅力に触れる、オープンキャンパス開催！

8月7日(火)から9日(木)の3日間、オープンキャンパスを開催しました。3日とも晴天に恵まれ、強い日差しが照りつける真夏のなか、高校生やその保護者の方など3日間で3300人を超える参加者で賑わいました。

学部ごとの開催のため日時及びプログラムは学部ごとに異なり、7日は薬学部と経営情報学部が、8日は食品栄養学部と国際関係学部が、9日は看護学部が、それぞれ趣向を凝らしたプログラムで参加者に各学部の魅力をPRしました。

どの学部もまずは大講堂での学部紹介で、学部・学科のカリキュラムや入学者選抜に関する説明を、学部によっては在学生によるキャンパスライフの紹介なども行いました。年々、参加者が増加しているオープンキャンパスですが、国際関係学部では、大講堂に座りきれないほどの参加者が集まりました。

大講堂での学部説明の後は、キャンパスツアーや模擬授業で実際に大学の雰囲気を感じてもらったり、懇談会や個別相談会などで教員や在学生の貴重な話を聞いていただきました。今まで静岡県立大学を資料やホームページでしか見たことのなかった方は、県立大学に対する印象が変わったり、進路がより具体的なものになったのではないのでしょうか。

また、管理棟には学生部相談コーナーを設け、過去の入試問題を入手したり、下宿情報を閲覧していただきました。



大講堂での全大会風景



模擬講義（薬学部）



実験室見学（食品栄養学部）



模擬授業（国際関係学部）



パソコン室での実習（経営情報学部）



実習体験（看護学部）

■県民の日イベント

私たちのふるさと静岡県が今のような形でスタートしたのは、1876年8月21日。そこで、“いま”の静岡県はもちろん、“過去”の歴史にふれたり、“未来”の姿を考えたり、静岡県を身近に感じる機会になればと、8月21日を中心に県内各地でいろいろなイベントが開催されました。本学では、大学構内見学会の「キャンパス・ツアー」と「環境科学研究所一般公開」が開催されました。

県立大学を体験!! 「キャンパス・ツアー」開催

キャンパス・ツアーは、県民の方々に、学内を見学していただき、県大に親しみを持ってもらうことを目的に開催しています。

本年は8月21日(火)にキャンパス・ツアーを開催し、県外からは群馬県、長野県等から、また、県内各地から参加があり、高校生を中心に小学生から会社員の方まで、84人の参加がありました。参加者は4グループに分かれて大学職員の誘導により各学部棟や図書館を見学しました。実習室、展示コーナー等では、教員から説明を受けたり、SALLでは体験学習を、また、遠隔講義システムを体験するなど、県大の施設・設備・研究内容に感心していました。

参加者からは、「当校へ入学する決心をした。」、「十分に大学の雰囲気を体験でき、またこのような機会があったら参加したい。」、「とても良い環境の中で施設が整っていて良かった。」などの声が聞かれました。



SALLでの体験学習



遠隔講義システム体験



看護実習室見学

「環境」にふれるチャンス！環境科学研究所一般公開

環境科学研究所では、県民の皆様には研究所を身近に感じ、どのようなことを研究しているのかを理解していただくとともに、環境学習などを通じて地域に貢献するため、毎年、「県民の日」の事業として「環境科学研究所一般公開」を行っています。

今年は、8月18日(土)に開催し、13の研究室において、それぞれの研究内容の展示やデモンストレーション実験などを行いました。また、小学生に、より興味を持ってもらうため、今年度はスタンプラリーを取り入れました。

小学生から高齢の方まで110名の参加があり、研究室の中に入って教員や大学院生の説明を聞き、日ごろ感じている疑問などを熱心に尋ねたり、自分の手で実験を行うなど、環境問題を実感しながら楽しく学んでいただきました。



研究室での実験体験



大学院生の指導のもとに

2006USフォーラム

2006USフォーラム開催される!!

USフォーラム実行委員会 委員長 木苗 直秀

8月2日(木)及び3日(金)の両日、2006USフォーラムが本学看護学部棟4階13411講義室等で開催されました。

今回のフォーラムでは、平成18年度に採択された学長特別研究費、教員特別研究費及び寄附講座における研究成果について、口頭とポスターで合わせて130件の発表が行われました。

例年と同様に一般公開され、本学教員、学生はもとより一般県民、企業関係者などおよそ280名が熱心に聴講されました。2日目の聴講者がやや少なかった反省点や質疑応答時間をもっと長くして欲しいとの要望がありました。発表後の意見交換の状況から、これを機会にさらに共同研究や受託研究に進展することが期待されます。



西垣学長の開会挨拶

聴 講 者 数

(単位：名)

区 分 日 別	本学教員	本学学生	一般県民・企業・研究機関等	計
第1日目 (8月2日)	127	120	30	277
第2日目 (8月3日)	115	52	6	173

当フォーラムは、本学における研究成果を発表する場として定着してきており、他部局における研究内容やアップデートな研究成果を聴講できる有効な機会となっております。各学部・研究科における専門的な研究はもとより部局横断的なテーマもあり、興味ある多くの成果が発表されました。

USフォーラムをはじめ、本学における日頃のたゆまぬ研究に対する熱意と努力が支えとなって、グローバルCOEプログラムの採択に結びついたのも一つの成果と思われます。

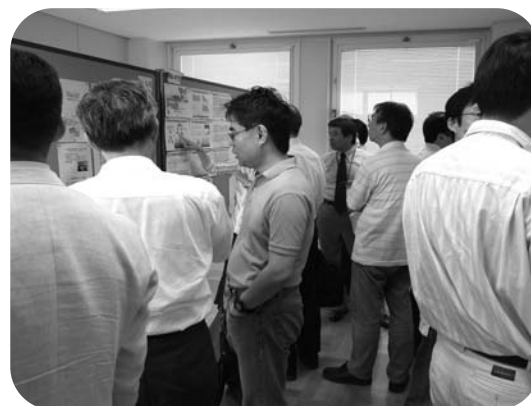
次回のUSフォーラムにおいては、この成果発表会が益々活気あるものになることを期待しています。



パワーポイントによる研究成果の発表



熱弁を振るう伊豆見教授



盛況だったポスター発表

「2006USフォーラム」1日目(8月2日) 発表プログラム

学長挨拶

グローバルCOE拠点リーダー報告

生活健康科学研究科 教授 木苗直秀

平成18年度学長特別研究費・教員特別研究費採択研究課題 口頭発表

No.	学部	発表者職・氏名	テーマ
1	薬学	講師 竹元万壽美	医薬品シーズとして期待される紅茶テアフラビンの高効率・高選択的合成法の開発
2	薬学	教授 奥 直人	遺伝子医薬品送達のための新規ナノキャリアの開発と難治がんの標的化治療
3	薬学	教授 野口 博司	遺伝子工学を活用した植物薬効シーズの開発
4	薬学	准教授 根本 清光	コレステロール生合成・代謝酵素遺伝子の発現変動を指標とした新規抗高脂血症食品(成分)の探索
5	薬学	教授 豊岡 利正	病態ラット体毛および人唾液のメタボライトプロファイリング解析
6	食品	准教授 熊澤 茂則	プロポリスおよびハチミツに含まれるポリフェノール成分の分析と抗酸化活性
7	食品	准教授 合田 敏尚	個人代謝プロファイル作成のために必要な機能的食品成分の摂取量推定と生体内バイオマーカーの関連に関する基礎的検討
8	食品	教授 大島 寛史	メタボリック症候群のバイオマーカーとしてのコレステロール炎症酸化物の新規同定
9	環境	教授 大橋 典男	感染症と生活習慣病に関する複合的研究
10	経情	准教授 湯瀬 裕昭	次世代型安否情報システムの開発
11	経情	教授 鈴木 直義	民産官学協働ソフトウェア開発による大学低学年教育 ―中間組織連携型PBL―
12	薬学	教授 鎌谷 東雄	Chafurosideの生物試験への供給 ―半合成法の確立と出発原料isovitexinの確保―
13	薬学	教授 山田 静雄	薬学的アプローチによる緑茶成分の疾病改善効果の検証と製剤化
14	経情	准教授 岩崎 邦彦	静岡県の地域ブランド構築と観光マーケティングの方向性
15	薬学	教授 野口 博司	生理活性天然物をシードとする地域密着型創薬を志向した総合的基礎研究
16	薬学	教授 菅 敏幸	医薬品として期待される茶有効成分の生物有機化学研究
17	薬学	助教 山本 博之	ウイルス病原性タンパク質と神経ペプチドの機能解析
18	薬学	講師 浅井 知浩	がん新生血管に標的化したsiRNA搭載リボソームの開発
19	薬学	准教授 池田 潔	フルオラス・タグを利用したシリアル酸誘導体の化学酵素合成
20	薬学	教授 今井 康之	抗体工学による組換え型IgAおよびIgG-IgAキメラ抗体の作製と性状解析
21	薬学	助教 横山 英志	超好熱菌由来の膜タンパク質のストマチンのホモログの結晶化
22	薬学	准教授 武田 厚司	うつ病モデルとしての低車鉛食飼育ラット
23	食品	教授 大島 寛史	静岡名物「とろろやマイモ」成分ジオスゲニンによる発がん予防とその機序の解明
24	生活健	社会人・学生 平塚 聖一	大型魚類特有のDHA含有リン脂質の脳機能・抗ストレスに関する基礎研究
25	食品	教授 中山 勉	茶カテキンおよびトクロイモが食品物性に与える効果の解析
26	食品	准教授 小林 公子	酸化ストレスが細胞・組織傷害ならびに糖尿病発症に及ぼす影響の検討
27	食品	教授 酒井 担	食品機能的性質の開発と基礎的解析

平成18年度学長特別研究費・教員特別研究費採択研究課題 ポスター発表

28	環境	教授 吉岡 寿	緑茶抽出物・キトサン複合体の研究
29	薬学	助教 関本 征史	肝増殖過程における肝機能分子の発現低下と Id (Inhibitor of DNA binding) 分子種の発現誘導
30	薬学	教授 山田 静雄	受容体遺伝子欠損動物を応用した創薬研究の新展開―受容体サブタイプ選択的薬物の評価系構築
31	薬学	講師 五十里 彰	タイトジャンクションの形成・崩壊に関与するリン酸化機構の解明
32	薬学	准教授 菅谷 純子	医薬品の有害事象回避に繋がる生体異物代謝酵素 (II相酵素) 発現調節の基礎的研究と臨床応用のための基盤形成
33	薬学	講師 三宅 正紀	レジオネラ新規感染制御因子の網羅的探索及び同定
34	薬学	教授 鈴木 隆	ヒトレスピロウイルスのシアロ糖鎖受容体結合性の分子基盤
35	薬学	准教授 左 一八	ウイルス―受容体糖鎖分子間相互作用の分子機構の解明とその応用
36	薬学	講師 原田 均	P2X ₇ 受容体の活性化におけるATPの分解の関与
37	薬学	講師 稲垣 真輔	メタボミクスのアプローチによる新規バイオマーカーの探索とその高感度測定法の開発
38	薬学	助教 清水 広介	がんへのリボソームDDSにおける腫瘍リンパ管新生の影響
39	食品	助教 丹羽 康夫	科学的根拠に基づく食の安全・安心の確立
40	食品	助教 堀江 信之	陸上脊椎動物で保存されたヒトチミジル酸合成酵素遺伝子のプロモーター配列の機能解析
41	食品	助教 望月 和樹	小腸におけるエビジェネティック調節と栄養素・ホルモンの役割
42	食品	助教 森安 裕二	オートファジーが持つ新しい生理的意義の検証
43	食品	助教 林 久由	細胞内pHによるCl ⁻ /HCO ₃ ⁻ 交換輸送体のイオン輸送活性調節
44	食品	助教 伊藤 創平	モノクローナル抗体R310のアルデヒド修飾蛋白質並びにアルデヒド修飾核酸認識機構
45	環境	准教授 伊吹 裕子	エビジェネティクス異常を標的とした薬剤付加による新規増感法に関する研究
46	国際	准教授 剣持 久木	広域ヨーロッパにおける歴史認識の共有の実験 ―仏独共通歴史教科書の射程―
47	国際	准教授 島田 孝夫	帝政ロシアにおける「黄禍」論の展開 (2)
48	国際	教授 小幡 壮	海外授業のカリキュラム化を目指して
49	国際	教授 立田 洋司	静岡県立大学と県内中・高校の協働による教育ミッション・プロジェクト
50	国際	教授 立田 洋司	カッパドキアのキリスト教文化とサンティアゴ・デ・コンポステーラ巡礼路の資料写真について
51	国際	講師 松森奈津子	インドアス問題とサラマンカ学派 ―「もう一つの近代国家論」―
52	経情	准教授 森田 克徳	日本マーケティング史 生成・進展・変革の軌跡
53	看護	助教 濱井 妙子	地域における外国人医療支援の推進に関する研究―ブラジル人市民に対する健康問題の正しい理解のための普及・啓発活動を通して―
54	看護	助教 濱井 妙子	在日ブラジル人に対する健康問題の啓発に関する研究
55	看護	准教授 奥原 秀盛	がん患者の家族を対象とするサポートグループにおける参加者の経験
56	看護	教授 金澤 寛明	形態学寺子屋の開設に関して
57	薬学	助教 山本 博之	神経ペプチドガラニンの細胞外プロセッシング機構による生理活性調節機構の解析
58	薬学	助教 高橋 忠伸	核内受容体CARのインフルエンザウイルス感染細胞内における動向
59	食品	准教授 河原崎泰昌	オートファジー関連蛋白質群の相互作用破壊:進化工学的手法によるペプチド性相互作用阻害剤の開発
60	環境	助教 豊岡 達士	生体内分子の動きに着目した新規高感度生体影響評価系の構築
61	環境	助教 内藤 博敬	河川中付着緑藻類の水質指標へ向けた遺伝子的解析法の検討
62	国際	教授 尾崎 亨	国際共同研究:米国イェール大学所蔵粘土板楔形文字文書刊行の準備 第2部
63	国際	准教授 大楠 栄三	バルドニバサンの小説第四作『ピラモルタの白鳥』(1885)の書き出し―歴史的意義について―
64	国際	准教授 前山 亮吉	日本政党政治と地域―地盤と政治家―
65	国際	講師 吉田 真樹	日本における「戦」の倫理
66	国際	教授 嵯峨 隆	戴季陶による「大アジア主義」の継承と展開
67	看護	助教 井下 裕子	運動器疾患における運動療法後の満足度に関する基礎的研究

「2006USフォーラム」2日目(8月3日) 発表プログラム

平成18年度学長特別研究費・教員特別研究費採択研究課題 口頭発表

No.	学部	発表者職・氏名	テーマ
1	環境	准教授 佐野慶一郎	廃茶に含まれるカテキンを用いた生ゴミ堆肥化の消臭処理に関する研究
2	環境	准教授 牧野 正和	静岡県の都市型河川水中に混在する環境汚染物質のリスク評価
3	環境	助教 寺崎 正紀	有機リン農薬から生ずる非意図的生成物の水環境中での挙動に関する基礎研究
4	環境	教授 橋本 伸哉	船舶により移入する生物による生態系攪乱：連続暗条件下における植物プランクトンの生存過程に関する研究
5	環境	教授 坂口 真人	環境刺激に応答する高分子固体材料表面に存在する分子鎖の運動転移の解析
6	環境	教授 吉岡 寿	キトサンを用いた人と環境に優しい界面活性剤の開発
7	環境	助教 唐木晋一郎	短鎖脂肪酸受容体GPR43のヒト結腸における発現分布
8	環境	教授 下位香代子	ベンゾ (a) ピレンによるDNA付加体のLC/MS/MS解析と付加体形成におよぼすCYP1B1阻害因子の影響
9	環境	准教授 伊吹 裕子	多環芳香族炭化水素の光反応中間体によるヒストンH2AXのリン酸化
10	国際	教授 伊豆見 元	日本の新政権発足と南北朝鮮
11	国際	教授 伊豆見 元	米朝関係の現状と今後の展望
12	国際	教授 六鹿 茂夫	黒海地域の安全保障と日本の「自由と繁栄の弧」外交
13	国際	准教授 津富 宏	就職未決定の規定要因に関する研究：仕事の決まらなさ、決められなさの探求
14	国際	准教授 兎矢野マリ	有害廃棄物越境移動パズル条約の国内実施と地方自治体-2004年の中国政府による日本からの廃プラ輸入禁止措置を題材にして-
15	国際	教授 小浜 裕久	静岡県企業の国際競争力と日本企業の国際分業の現状-好成绩企業の事例研究と静岡県企業への教訓-
16	国際	教授 小浜 裕久	ドーハラウンドと世界経済の諸課題
17	国際	教授 梅本 哲也	ブッシュ政権の対外政策とその代替路線-民主党穏健派の場合
18	国際	教授 渡邊 聡	「本土化」と「沖縄化」の中の沖縄の社会と意識-ある女性の戦後生活史を通して-
19	国際	教授・指導助手 紺野・ホナフリップ	Continuing Improvements in International Relations Students Presentation SKILLS
20	国際	講師 澤崎 宏一	日本語研修プログラムの構築
21	経情	教授 勝矢 光昭	色覚バリエーション画像処理の研究 ~色盲・色弱シュミレータの開発~
22	薬学	講師 江木 正浩	微量金属を含む医薬品の創製研究
23	薬学	教授 今井 康之	疾病微生物や薬物の有害作用に対する生体防御機構の研究
24	薬学	教授 石川 智久	一酸化窒素NOによる膵β細胞機能の生理的調節とその破綻による糖尿病発症の可能性
25	薬学	教授 伊藤 邦彦	Warfarin反応性の予測マーカーとしてのVKOC1、CYP2C9 遺伝子多型情報
26	看護	准教授 岡本 恵里	臨床看護師を対象とした遠隔授業によるフィジカル・アセスメント教育方法の検討
27	短大	講師 千綿おかる	知的障害者施設職員における歯磨き介助負担感の関連要因
28	短大	講師 中澤 秀一	転換期にある賃金・雇用システム

平成18年度寄附講座研究成果発表

29	寄付講座	客員教授	伊勢村 護	食品成分の細胞機能へ作用の研究
----	------	------	-------	-----------------

平成18年度教員特別研究費採択研究課題 ポスター発表

30	薬学	教授	赤井 周司	加水分解酵素を利用する光学活性アリルアルコールの新規製造法
31	国際	教授	稲田 晴年	フランス「知識人」研究 IV
(32)	国際	准教授	福田 律	イラン・アフマディネジャード政権の権力構造とイデオロギー -イランの核問題を検討する-
33	国際	講師	伊藤 一頼	国際法上の開発問題における自決権概念の位置付け -脱植民地化過程の分析を素材として-
34	国際	教授	園田 明人	事象間関連情報の要約提示による随伴性判断の基礎分析
35	国際	教授	富沢 寿勇	地域通貨を媒介とする地域再生運動の文化人類学的研究
36	国際	教授	小幡 壮	アジア地域における民族問題と国際関係
37	国際	准教授	津富 宏	参加型ワークショップによるキャリア形成支援の研究：教材作成に向けて
38	国際	教授	坪本 篤朗	言語研究の多面性
39	国際	准教授	小谷 民菜	十九世紀の歴史的局面におけるドイツ・フランスの風刺画比較
40	国際	准教授	澤田 和葉	アメリカ研究における次世代アイデンティティ論のシナリオ作り
41	国際	教授	栗田 和典	監獄、刑場、裁判所のしるしーオールド・ベイリをめぐる記憶の表象ー
42	国際	講師	宮崎 晋生	電算機資本自由化をめぐる業界、財界と日米関係
43	国際	准教授	兎矢野マリ	国際環境条約の執行過程における手続的手法の意義に関する研究
44	国際	助教	比留間洋一	岡村昭彦文書の利活用とデータベースに関する学部際的研究と実践
45	国際	准教授	カーク C.ハイド	The Evolution of the University of Shizuoka In-House English Placement Examination:Test Construction,Evaluation,and Innovation
46	経情	准教授	武藤 伸明	非工学系学部での情報工学教育に関する、カリキュラム及び教材の具体的策定に関する研究
47	経情	助教	岸 昭雄	企業の立地外部性が交通施設整備の便益に及ぼす影響の分析
48	経情	助教	上野 雄史	代行返上に関する企業の財政的要因の実証分析
49	看護	助教	佐藤 智子	学生のパソコンを活用した自己学習を促進するための学内実習室の環境整備に関する検討
50	看護	教授	金澤 寛明	簡便で、練習効果のあがる基礎看護実習モデルの作製
51	看護	教授	木村 正人	障害腎が萎縮へ向かうか、腫大に向かうかの岐路を決定する因子は何か
52	看護	助教	池田 和恵	看護実習における患者と学生の交流について
53	短大	講師	那須 恵子	竹炭浸漬液のヒトう蝕誘発細菌への抗菌効果 (2)
54	短大	准教授	吉田 直樹	Tissue Inhibitors of Metalloproteinases 発現における Tumor Necrosis Factor α の影響
55	短大	准教授	高林ふみ代	NSYマウスにおける糖尿病性腎症発症と緑茶カテキンの効果の検討
56	短大	講師	増田 明美	全国の通信制高等学校における保健室に関する実態調査
57	短大	准教授	鈴木 温子	歯科医療分野におけるコミュニケーションリスクを探る - 選ばれる医療機関を目指して -
58	短大	教授	藤原 愛子	地震被災者の歯科衛生状態・状況の改善に関する基礎的検討
59	短大	講師	内藤 初枝	「糖尿病食事療法」を活用した食事の自己管理に関する研究 - 「ビンゴ式食事管理シート」活用を通して-
60	短大	講師	前野真由美	静岡県中部在住外国人の腰痛の現状と腰痛教室の効果
61	短大	教授	古賀 震	新しいDIC診断基準の提唱-レトロスペクティブスタディーの解析-
62	短大	准教授	奥田 都子	生活文化と生活史をふまえたレクリエーション援助に関する研究
63	短大	講師	海老名和子	トレーニング模型用歯肉の試作
64	短大	講師	山本 智美	新人歯科衛生士におけるヒヤリ・ハットの事態と要因について

静岡県公立大学法人設立記念事業 「第7回日本健康・栄養システム学会」開催

平成19年6月30日(土)、7月1日(日)の2日間、本学大講堂
他で静岡県公立大学法人設立記念事業、第7回日本健康・
栄養システム学会(大会長 西垣克学長)が開催されました。
メインテーマは「臨床栄養師の歴史的な一歩を支えよう」
で、約320名が参加しました。細谷憲政氏(東京大学名誉教
授)による特別講演「人間栄養学の体系と将来的展望」で
は、医薬品と栄養素の相互作用の検証の必要性が解説さ
れました。三浦公嗣氏(文部科学省高等教育局医学教育課
長)による教育講演「医学教育の改革と臨床栄養」では、「支
える医療」や多職種協働による新しいチーム医療、地域
への貢献を見据えた教育のあり方が提案されました。ま
た、昨年度から栄養ケア・マネジメントの実践能力を身に
につけるための900時間の臨床研修を開始した本学会の認
定資格「臨床栄養師」について最初の資格認定者63名が
誕生し、「臨床栄養師研修：経過と課題」のシンポジウム
の後、認定式が挙行されました。シンポジウム「栄養
ケア・マネジメント(NCM)の戦略と展望」(座長：中村丁
次氏(神奈川県立保健福祉大学学部長)、杉山みち子氏
(神奈川県立保健福祉大学教授))とシンポジウム「栄養
ケア・マネジメントと多職種連携」(座長：合田敏尚氏
(本学准教授、副大会長))では、栄養ケア・マネジメント
の体制整備、それを担う人材の育成などについて、熱心
な討論が行われました。



静岡県公立大学法人設立記念セミナー 「静岡でこれからの医療体制を考える」を終えて

大学院経営情報学研究科附属地域経営研究センターは、6月16日、
「静岡でこれからの医療体制を考える」と題して、大講堂にて公立
大学法人設立記念セミナーを開催しました。演者には、厚生労働省大
臣官房総括審議官を務められる宮島俊彦先生と、地元静岡選出の衆
議院議員で自由民主党政務調査会副会長を務められ、また、夜間医
療問題の勉強会を発足された上川陽子先生を招きました。かねてより
医療・福祉事業の経営者育成に取り組む本学経営情報学部西田
在賢教授がセンター長を務める関係で実現したこの公開セミナー
には、北海道から沖縄まで全国から250名近くの方が参集しました。

前日「グローバルCOEプログラム採択」の吉報を受けて機運の高
まる中、西垣克学長の挨拶から始まり、最初に演壇に立った上川講
師は、医療財源は「削減ありき」ではなく、「いかに確保していくか」
であると、発想を転換する必要性を指摘され、医師不足や医療従事者
への負担過多という現状を改善するためには、病院や診療所が連携
を深め、それぞれが特徴を活かして役割分担しながら患者をケア
する体制作りが急がれると論じられました。続く西田教授からは、
現行の国民皆保険制度では、医学・医療の急速な進歩のもとで、
加入者に対して次々と新しい医療サービスを保険がカバーし、ま
た、病医院に対して出来高で支払うということが困難になっている。
そこで、米国マネジドケアの社会実験の結果から導出される、保
険者と病医院等医療提供者と保険加入する患者の三者の間で経済
リスクをバランス良く分担する「医療資金マネジメント」の視点が
不可欠となることを説明しました。そして最後に登壇した宮島講
師からは、患者本位の医療を提供できる体制を整えるとして、社
会保障費を無理なく削減していくために、病院の再編成、マンパ
ワーの確保、医療機関の連携と情報発信、高齢者向け医療の今後
と財源の確保が、医療構造改革におけるポイントになることが示
されました。

日本の中央に位置して、380万県民の保健福祉医療事業に取
り組む静岡県にあって、静岡県立大学地域経営研究センターが発
信する医療・福祉事業経営のセミナーは、昨秋以来3回目を迎え、
全国から駆けつける参加者の数は増え続けており、医療・福祉
経営に対する関心の高まりが実感されました。(地域経営研究
センター 大吉真里)



西垣学長

第5回国際受容体・シグナリング・薬物作用 シンポジウムを開催

組織委員長 薬学部 薬学科 教授 山田静雄

去る5月10日(木)、11日(金)に「第5回国際受容体・シグナリング・薬物作用シンポジウムー生体機能、疾患および創薬における受容体の役割ー」がグランシップで開催されました。このシンポジウムは、生体内での情報伝達と薬物作用の要となる受容体の構造と機能、受容体への薬物の作用に関する最新の研究成果について、国内外の研究者が一堂に集い、議論し情報交換するものです。

シンポジウムには国内外の大学、公的機関の研究者および製薬企業関係者約350名が参加し活発な議論が展開されました。国外からは米国、カナダ、オランダなど11カ国30名の招待講演者および参加者があり、また静岡県立大学国際交流提携校(タイ国マヒドン大学およびコンケン大学)から5名の発表者(薬学部教員と大学院生)が来日しました。さらに若手研究者や大学院生の参加および研究発表が奨励され、ポスター発表も63演題を数えるに至りました。

本シンポジウムにおいて、各国の受容体研究者が一同に会し密度の高い議論を展開することができました。受容体に関する基礎および臨床を包含した最新の研究成果の発表・討議を通して受容体研究の新たな方向性と斬新な発想も提示され、今後受容体研究の新展開が期待されます。また、若手研究者や大学院生が多数参加し、国内外の著名な受容体研究者との交流を通じて、次世代科学者の育成や国際交流推進のための有意義な機会となりました。本シンポジウムの成果は、薬効解析学分野で著名なドイツの学術雑誌「Naunyn-Schmiedeberg's Archives of Pharmacology」に査読後、約40報の総説あるいは原著論文として掲載される予定です。



「茶どころ静岡から情報発信：第4回日本カテキン学会総会」

薬学部 薬学科 教授 菅敏幸

猛暑が続く8月23日と24日、しずぎんホールユーフォニアで、第4回日本カテキン学会総会が、本学副学長の木苗直秀教授を実行委員長として開催されました。これまで本会は東京で開催されてきましたが、やはり「茶」は静岡ということで、全国の幅広いカテキンに関係する総勢140名を越す研究者が参加しました。トップバッターの佐野満昭教授(名古屋女子大)の基調講演「カテキン研究の昔・今・未来：茶カテキンについて」の後、2つのシンポジウム・県民講座・18題の一般講演・トピックスと、広範な研究の最前線の発表と情報交換を行いました。県民講座の「カテキンで病気を予防しよう」では、カテキンの摂取(お茶を飲むこと)による、抗菌・抗ウイルス(インフルエンザ)、メタボリックシンドロームやガンの予防や臨床応用についての報告があり、多くの聴衆からの熱心な討議が繰り広げられました。また、シンポジウムでは、カテキンの生理活性と生体内成分との反応の最新の成果の報告がありました。近年の分子生物学や分析技術の目覚ましい発展により、漠然としていたカテキンの効能が分子レベルで解明されていることには感動しました。また、最後のトピックスでは、「カテキン合成への道」というタイトルで有機合成化学者の発表が行われました。これまで、合成化学者の研究対象とされることのなかったカテキンですが、21世紀を迎えてポリフェノール類は大きな注目を集めています。また、化合物の自在な合成により、詳細な生体成分との相互作用や生物活性への展開が可能となり、健康と長寿への貢献だけでなく、新しいサイエンスの誕生も大きく期待されます。

本年6月、本学の生活健康科学研究科と薬学研究科で応募した「健康長寿科学研究の戦略的新展開」は、超難関を突破してグローバルCOEプログラムに採択されました。もちろん、「お茶のカテキン」は本プログラムの重要テーマです。本学会を通して、静岡から発信しなくてはならない「使命感」はもちろん、新しいことがたくさんできそうな「予感」を、強く感じさせられました。



写真左から、中島(富山県立大)、中山、木苗(本学)、大森(東工大)島村(昭和医大)、田中(東工大)、菅、野口、古田(本学)

〽 奨学金をありがとうございます 〽

「日本平留学生基金」入学祝金贈呈式

日本平留学生基金(代表イトウ秀雄氏)贈呈式が5月22日に本学で行われ、今年入学した学部留学生12名全員(食品栄養科学部2名、国際関係学部6名、経営情報学部4名)に1人ずつ入学祝金1万円が贈呈されました。

日本平留学生基金は、県立大学に在学している主として東南アジアからの留学生に金銭的援助を行うことを目的として平成8年にイトウ秀雄氏の還暦記念に設立された基金であり、今年で12年目を迎えました。また、イトウ氏の基金募集の趣旨に賛同した協力者は500を超える個人・団体にのびります。

贈呈式でイトウ代表は、「大学に入って何をすべきか、また卒業の時点でどんな自分になっていたかを考え、「志」を持って頑張る欲しい。」と挨拶し、留学生を代表して国際関係学部1年ウィターラナゲ アサンカ スリ ナーマル ロドリゴさんが「(イトウ氏への)感謝の気持ちを忘れずに充実した学生生活を送りたい。」とお礼の言葉を述べました。



「富士川町静岡県立大学留学生就学奨励金」交付式

富士川町文化事業振興会が支給する就学奨励金の交付式が6月16日、富士川町中央公民館で行われ、学部1年の留学生12名全員に1人あたり6万円が支給されました。

この就学奨励金は、本学に在学する優秀な留学生に就学奨励金を交付し、留学生の教育・研究活動を支援するとともに、富士川町が主催する事業を通じて、留学生と富士川町民との相互の心の触れ合いを深め国際交流を図ることを目的としています。

交付式では坪内伸浩富士川町長が挨拶し、留学生を代表して国際関係学部1年張愛真さんがお礼の言葉を述べました。



地元企業からの奨学金

奨学生を募集する企業がそれぞれ論文テーマを定め、応募論文が優秀であると認められた学生に贈られる奨学金です。

「万城食品奨学金」授与式

(株)万城食品奨学金授与式が7月4日に三島市の万城食品本社にて行われました。本奨学金は、(株)万城食品により中国出身の留学生への奨学金支給を目的として設立され、今年度で11回目を迎えました。本年度は、経営情報学部1年陳 仲興さんが選ばれました。

授与式では、(株)万城食品の米山寛代表取締役から目録が贈られ、陳 仲興さんがお礼を述べました。



「TOKAI奨学金」奨学生認定書授与式

(株)TOKAI奨学金奨学生認定書授与式が6月19日に本学で行われました。本奨学金は、(株)TOKAIにより地域に密着した企業の事業の一環として設立され、今年度で16回目を迎えました。

「企業におけるコンプライアンスについて」を論文テーマに募集し、食品栄養科学部3年河野 里美さん、経営情報学部3年神戸 恵さん、国際関係学部3年張 劍涛さんが選ばれました。

授与式では、(株)TOKAIの真室孝教常務から認定書を贈られ、「日本の文化を深く理解し、これからの日中交流に貢献したいです。」(張さん)など、奨学生がお礼の言葉を述べました。



「静清信用金庫奨学生」奨学金授与式

静清信用金庫奨学金授与式が6月28日に静岡市葵区の静清信用金庫本部で行われました。

本奨学金は、地域社会の発展に貢献する静清信用金庫の基本方針に従い、次代を担う人材育成を目的に設立され、今年度で11回目を迎えました。

「私が考える地域活性化への取組み」を論文テーマに募集し、看護学部1年勝倉望さんと看護学部3年の堀内志保さんが選ばれました。

授与式では、静清信用金庫の白鳥良作理事長から認定書を贈られ、堀内さんが「助産師になるための書籍購入費用などに有効に使わせていただきます。」とお礼の言葉を述べました。



「静岡ガス奨学生」認定証授与式

静岡ガス(株)奨学生認定証授与式が6月18日に静岡市駿河区の静岡ガス(株)本社で行われました。

本奨学金は、静岡ガス(株)により、社会有用の人材育成に寄与することによって地域社会への貢献を図ることを目的に創設され、今年度で7回目を迎えました。

「自分自身の将来像について」を論文テーマに募集し、国際関係学部4年 奚雅璇さん、薬学部2年遠藤 友香里さんが選ばれました。

授与式では、静岡ガス(株)岩崎清悟取締役社長から認定証を贈られ、「意欲を持って自己研鑽に励み、常に感謝の気持ちを持って研究活動を行いたいと思います。」(遠藤さん)とお礼の言葉を述べました。



「清和海運奨学金」授与式

清和海運(株)奨学金授与式が8月10日に本学で行われました。

本奨学金は、清和海運(株)により、地域に密着した企業として経済的に就学困難な学生の援助をすることを目的に設立され、今年度で5回目を迎えました。

「物流業におけるCO2削減の課題と今後の可能性について」を論文テーマに募集し、薬学部3年佐々木華絵さん、経営情報学研究科修士課程2年吉田 雄紀さん、生活健康科学研究科博士前期課程1年加治いずみさんが選ばれました。

授与式では、清和海運(株)の近藤 正取締役から認定書を贈られ、「お返しできる事は、一生懸命勉強する事であり、大学に貢献することだと思いますのでより一層勉強に励みたいと思います。」(佐々木さん)など、奨学生がそれぞれお礼の言葉を述べました。



「天野回漕店奨学生」認定書授与式

(株)天野回漕店奨学生認定書授与式が7月26日に本学で行われました。

本奨学金は、(株)天野回漕店により「共存共栄」の経営理念に沿って地域社会の発展に努め、地元静岡県の学生の奨学奨励に寄与することを目的に設立され、今年度で13回目を迎えました。

「自国と日本文化の違いについて。又、日常生活で感じていること。」等を論文テーマに募集し、経営情報学部2年ディン ティ カム ニュンさん、国際関係学部2年王 雷さん、同2年周 露叶さんが選ばれました。

授与式で(株)天野回漕店の小長谷修誠取締役社長は、「グローバル化の中で東南アジア諸国・中国と日本の関係はより一層重要になるため、努力してほしい。」と激励の言葉をかけられ、奨学生がそれぞれお礼の言葉を述べました。



「東海澱粉国際交流奨学基金」授与式

公益信託東海澱粉国際交流奨学基金授与式が8月25日にグランシップで開催された「東海澱粉(株)創立60周年記念大会」において行なわれました。

本基金は東海澱粉(株)により静岡県内の大学院に在学しているアジア諸国からの留学生への奨学金支給を目的として平成10年4月に設立されました。

同基金の運営委員会の審議を経て、本学からは生活健康科学研究科博士前期課程1年 巖 豊さん、同研究科博士前期課程1年 グエン ティ トゥ チャンさん、同研究科博士前期課程2年 ラトゥワランゴン アレン ランス エステファヌスさんの3名が採用されました。

授与式では目録が贈られ、奨学生を代表してラトゥワランゴン アレン ランス エステファヌスさんが「熱心に研究に励み、将来母国の環境問題の改善に貢献したい。」とお礼の言葉を述べました。



「朝鮮通信使」を再現 — 延世大生と市内を行進

今年は、徳川家康が当時の朝鮮王朝(李朝)からの外交使節である朝鮮通信使を受け入れて400周年にあたります。朝鮮通信使ゆかりの日韓両国の各地では自治体などによる記念行事が行われていますが、去る5月、静岡市でもいろいろな関係行事がありました。

その一環として、本学の学部生・院生の有志が、昨年11月に交流協定を締結した韓国の延世大の学部生・院生と共に、当時の衣装を身にまとっての再現行列を5月19日に静岡市内で行いました。日中の気温が30度近くとなった真夏並の暑さのなかでしたが、一般市民の参加者300名余りと共に、駿府公園や繁華街を練り歩き、沿道の見物客を喜ばせました。

延世大の鄭甲泳副総長一行が昨年本学を訪れた際に、一行は静岡市で朝鮮通信使400周年を記念する関係行事があることを知りました。その後、「再現行列に学生らを送りたい」という希望が同大から本学へ寄せられ、関係行事の主催者「大御所家康公駿府城入城四百年祭実行委員会」を主管する静岡市の全面協力のもと、実現したものです。3月に訪韓した西垣学長が、同大側に本学学生らとの再現行列の実施を正式に伝えていました。



両校の学生・院生約50名は、行列後には交流会を持ったり、市内を視察したほか、「日韓交流親善シンポジウム」(5月20日、日本平ホテル)などに参加しました。このシンポジウムは、超党派の国会議員でつくる「朝鮮通信使交流議員の会」が主催したもので、権五琦・元韓国副総理の基調講演や、両国の国会議員・ジャーナリストらによるパネルディスカッションに耳を熱心に傾けていました。本学からは国際関係学部の小針進教授がパネラーになったほか、同学部4年生の齊藤広樹君が意見を述べました。

このように、両大学間の交流協定は締結されたばかりですが、実質的な交流が進んでいます。この交流事業は、静岡市の協力で実現しましたが、今後も官民関係者の支援での交流活性化が望まれるところです。



学生の声

～延世大生との朝鮮通信使再現行列に参加して～

出口美早紀 (国際関係学部3年生)

「なんか楽しそう」——。最初に朝鮮通信使再現行列参加の話を知ったとき、単純にそう思いました。私はロシア語を選択していたので、韓国・朝鮮については最近学び始めました。どういう経緯でこの再現行列が開催されることになったのか、そもそも朝鮮通信使とは何か、こうした予備知識が足りないままに参加しました。しかし、行列出発前にあった静岡市長のお話を聞き、また、街中を練り歩きながら、400年前に思いを馳せました。この間、日本と朝鮮半島の間には友好もあれば、不幸な歴史もありました。時代を超えての行列再現の意味が、少し分かったような気がします。ともあれ、日韓学生による行列を町中で偶然で目にした多くの人たちにも、「なんか楽しそう」といった雰囲気伝わっていただければいいと思います。

カリフォルニア州学生のための日本語研修プログラムを実施

国際関係学部 国際言語文化学科 教授 吉村紀子
国際関係学部 国際言語文化学科 講師 澤崎宏一

2007年7月2日から7月27日までの4週間、「カリフォルニア州学生のための日本語研修プログラム」が実施されました。静岡県とカリフォルニア州が友好提携をしていることからこのプログラムが計画され、2名の参加者を受け入れました。カリフォルニア州立大学サンマルコス校2年生のクリス・バトゥン君とデビス高校2年生のブライアン・キーン君です。

プログラムは、週13-18時間の日本語研修に加え、県大教員による言語や文化に関する特別講義、市内の高校訪問、県大生との交流、ホームステイなど、様々な活動を通して日本語と日本文化が学べるように設定されました。特に県大生との交流では、20人以上のボランティアがカンパセーション・パートナーとして積極的に活動してくれました。

このような形式の日本語集中研修プログラムは、県立大学にとって初めての試みでした。全くの手探りの状態で準備を始めましたが、職員・教員から臨時スタッフ、学生やホストファミリーのご家族にいたるまで、多くの関係者が力を出し合った結果、実りのあるプログラムを作り上げることができました。直接、間接を問わず、これまで係わってくださった方々に、この場を借りてお礼申し上げます。

なお、プログラムに関する情報は、ホームページで見ることができます。

(<http://www.u-shizuoka-ken.ac.jp/~langcom/California%20Program/Top%20Page.html>)

ホストファミリーからの言葉

杉山家

カリフォルニアからの学生を受け入れて

今回、県立大学の第1回日本語プログラムのホストファミリーとして、カリフォルニアからクリスという19歳の男子学生を我が家に二週間受け入れることになり、これは、私たち家族にとって、非常によい思い出になりました。娘はクリスと英語で会話ができているようですが、私と妻は簡単な会話も思うように通じず、お風呂はいつ入るのか、何時に寝るのかなど、基本的な生活の質問をするにも、はじめは苦労しました。しかし、同じ屋根の下で暮らし、食事を共にする中で、だんだん日本語も、英語も交じり合ったコミュニケーションを楽しむことができるようになりました。妻は最後まで身振り手振り、日本語で通していましたが、何とか理解してくれたようでした。「彼は日本語を勉強しに来たのだから、これでいいのだ」と、妻は言っていました。最後には、みんなで手巻き寿司を食べながら、アメリカと日本の文化の違いなどを笑いながら話せるまでになったのです。クリスが日本語への興味を持ち、静岡とカリフォルニアの交流の架け橋になり、再来日したときに、日本語で話ができたら、なんとすばらしいことでしょう。今後の活躍に期待したいです。



Chris & Host Families 杉山 & 牧田家

ホストファミリーからの言葉

青嶋家

台風接近のニュースが流れる中、私達は少し緊張しながら、ブライアンと出逢いました。矢継ぎ早の質問にまじめに答え、遠慮がちで礼儀正しい、そんな彼を私達は大好きになりました。

長女は彼を弟のように思い、毎日「いってらっしゃい」「おかえり」と声を掛け、ケーキを焼いたり、一緒に餃子を作ったり、彼の世話をするのを楽しんでいました。下の娘は彼が我が家に来ると決まった時から、浴衣を縫ってプレゼントしようと準備を始め、本を見ながら仕立て上げました。彼も楽しみにしてくれていた様で、浴衣を着て「ラストサムライ」と言ってとても喜びました。

ブライアンが夕食にスパゲティーを作ってくれました。別れの時の近いことを実感しました。彼と過ごした二週間は、私達に共有できる思い出になりました。ホストファミリーとして、この度のプログラムに参加できたことを嬉しく思っています。ありがとうございました。



Brian & Host Families 青嶋 & 脇谷家

学生のコメント

ブライアン・キーン

My stay in Japan has been wonderful. We began a month ago and now have completed our program. While we underwent our education it was very helpful to have a full immersion into the Japanese language. Furthermore in California I rarely got a chance to practice Japanese and therefore my knowledge of the language quickly slipped away if I was not in Japanese class. By coming to Japan I could practice using daily expressions and gained many new vocabulary.

Daily life in Japan is very interesting from the view of a foreigner. While at home you are always used to a daily routine, when you travel that daily routine is changed drastically, especially when you travel to a foreign country. Furthermore I really enjoyed living the life of a college student in Japan. I was very surprised to see the differences between Japan and California. For example one of the big things I noticed was the size of the University of Shizuoka. In America, colleges are often very large, and consist of many people who rarely get to know each other. However in Japan almost every student knows each other and everyone greets one another in the hallways. I love when I just walk around campus and see people I know and just say "hi".

Overall Japan has again surprised me with a lifetime of wonderful memories. Also I would like to thank the University for the help that they have given me and the wonderful experience
 Brian Keene

どうもありがとうございました。先生、スタッフの皆さん、ホストファミリーの皆さん、そして学生の皆さん、ありがとうございました。日本の経験はすばらしかった！
 ブライアン キーン (貴院 武雷庵)

学生のコメント

クリス・バトゥン

During my 4 week stay in Shizuoka I learned much about the Japanese language and culture. I enjoyed my university class as well as the extra activities and lectures. The students and faculty of Shizuoka Kenritsu Daigaku were all very friendly and helpful and made the overwhelming task of learning Japanese seem possible. Living in Japan for the last month has motivated me to further continue my education and hopefully I can return to Japan soon.

Chris Battin

日本をはなれるのがとてもさみしいです。 たすけてくれたみなさん、ありがとうございました。

(クリス バトゥン)



県大授業訪問



授業風景



修了式にて



カンパセッションパートナーと

リール政治学院留学体験記

国際関係学部 国際言語文化学科4年 小川 恵理子

私は、2006年9月から2007年6月までの10ヶ月間、本学と国際交流協定を結んでいるフランスのリール政治学院に留学しました。リールはフランス北部に位置するノール県の中心都市で、フランスでは比較的大きな工業都市です。パリはもちろんロンドン、ブリュッセルなど主要都市との交通の便も良く、人も親切なのでとても生活しやすい街だと思います。

リール政治学院 ～グランゼコール、フランスのエリート養成校～

リール政治学院は、グランゼコールと呼ばれる高等専門教育機関で、フランスのエリート養成校と言えます。そのため、フランス人学生はもちろん、ヨーロッパを中心とした留学生たちの意識もとても高く、積極的に学ぼうという学生の熱意が感じられました。

留学生である私は、留学生向けの授業の他に2年生と4年生の授業を履修することができましたが、他の留学生たちに比べ語学力も政治の知識も乏しい私にとっては、フランス人学生に交じって授業を受け、それを理解することは予想以上に厳しいものでした。初めは、聞き取れた単語をノートにメモして意味を調べるといった作業を繰り返すので精一杯でした。しかし、後期になり、次第にフランス語にも耳が慣れ、フランス政治史などを学び、授業の内容が少しずつわかるようになって楽しく思えるようになりました。できるだけ多くの単語を聞き取ろうと必死になっていると、一コマ2～3時間の授業もあっという間でした。

留学生向けの授業では、時事問題やフランス政治制度を学ぶと同時に、フランス流「方法論」の理解が重要視されていました。テーマの分析・定義・問題提起などから始まり、テーゼとアンチテーゼ、そして、結論といったようにとにかく論理的で、レポートや試験は、すべてこの「方法論」に沿って進めなければいけません。

慣れないやり方に最初は戸惑い、自分で実践できるまでにはかなり時間がかかりましたが、フランス流の思考方法を理解する良い機会になりました。



フランス人の友人を招いて

フランス人は、小さい頃からこのように論理的に考える訓練をしていると思うと、普段の会話でフランス人が「論理的」という言葉を多用するのも納得できる気がします。

2007年フランス大統領選 ～政治に対する高い関心～

私が留学していた2007年は、幸運にも5年に一度のフランス大統領選挙が実施された年でした。テレビやラジオ、新聞は連日、大統領選の話題で持ちきりでした。普段でも、若者からお年寄りまで政治について議論するのが大好きなフランス人ですが、今回の大統領選に関しても、国民の政治に対する関心の高さが窺えました。例えば、4月に行われた大統領選一次投票では、84.60%という非常に高い投票率を記録しています。

そして、私は、選挙期間中ならではの貴重な体験もできました。それは、リールで開かれた保守派のニコラ・サルコジ候補や社会党のセゴレーヌ・ロワイヤル候補の集会を見に行く機会に恵まれたことでした。演説を行った会場は、プラカードやポスターを持った支持者で埋め尽くされ、皆大声でスローガンを合唱したり、歌を歌ったりとまるでお祭りのような盛り上がりでした。国民の政治に対する関心の高さ、国民と政治との距離など、日本とフランスとの間にある大きなギャップを肌で感じた場面でもありました。

その後も一次投票、決選投票、そしてサルコジ新大統領の誕生とそれに伴う暴動など、歴史的な瞬間に立ち会えたことは、私の留学生活の中の忘れられない思い出となりました。

今回の留学を通じて、フランスでの生活やそこで出会った人たちは、学習面ではもちろんのこと、精神的にも私に大きな影響を与えてくれました。この経験を今後の人生に生かしていければと思っています。

最後に、このような機会を与えてくださった大学と先生方に、この場を借りてお礼を申し上げます。ありがとうございました。



地域の人に自国の料理を紹介する企画に参加

リアル政治学院で政治を学ぶ

2006年9月から2007年6月までの10ヶ月間、フランスのリアル政治学院で私は、主に国際問題、フランス国内政治、EU（欧州連合）関係、文化人類学などを学びました。私は、留学生中心の必修の授業とフランス人学生が聴講する自由選択の授業を履修していました。必修の授業では、政治学習の基礎である政治理論や1945年以後のフランス国内政治、現代の国際問題などを講義形式と生徒参加型のゼミ形式で学びました。特に、ゼミ形式の授業では、欧米からの留学生の意見交換が活発に行われ、それによって、フランスと他の諸国との政治制度の違いや各国が抱える国内問題などを身近に知ることができたことは、とても良い刺激になりました。また、自由選択の授業でも、EU関係を実際にEUの中心国であるフランスの地で、フランス人学生とともに専門的に学ぶことができたことは、私にとって日本では体験できない貴重な経験になったと思います。私の語学力の問題もあり、授業の流れに追いつくのはなかなか大変でしたが、理解できなかった部分をフランス人学生に教えてもらったり、授業を録音したものを家で聞いたりして知識を補いました。授業内容だけでなく、自ら工夫して勉強する方法も学ぶことができた学校生活だったと思います。

リアルという街について

リアルは、私が留学生活を送るのにとても適していた街だと思っています。その理由として私が感じたことは、比較的過ごしやすい気候であったこと、街がさほど大きくない割には店や映画館が充実



リアルのカーニバル

して生活に困らなかつたこと、外国人を観光客と見なして英語で話しかける人々が少なかったため、フランス語に集中できたことなどが挙げられます。また、リアルはヨーロッパ諸国への交通の拠点であり、電車でベルギーのブリュッセルまで30分、パリまで1時間、ユーロスターでイギリスまで約2時間と、移動に大変便利な街でもあったので、私も休日や学校終了後には、リアルを拠点に他のヨーロッパ諸国へと旅行を楽しむことができました。

友人との交流

他の留学生に比べてフランス語力の乏しかった私にとって、食事を作って友人を招待することは、ゆっくり話をしながら親しくなれる良い機会でした。また、食事での会話を通してお互いの国の文化、政治、教育制度などについて知ることができ、とても良い国際交流の場ともなりました。特に、私は、主に日本食の代表である寿司をよく作り、もてなしたり、外国人学生にその作り方を教えたりしました。反対に香港から来た友人たちは、私に餃子や中国のデザート作り方を教えてくれました。

また、個々での友人との交流の他に、リアル政治学院にはフランス人の生徒が運営する留学生支援組織が存在し、留学生同士

又は留学生とフランス人同士の交流のために、しばしば様々なイベントを主催していました。例えば、留学生それぞれが自国の料理を作って持ち寄る食事会や、留学生一人一人にフランス人学生のパートナーをつけて交流を深めようとするイベント、小旅行、ソワレと呼ばれるバーでのパーティー、リアルの公民館でフランス人の子供たちに各国料理の作り方を教えるイベントなどがありました。それぞれのイベントは工夫の凝らされたものが多く、そういったイベントに積極的に参加したことで、様々な国々の友人と話す機会が増え、より親交を深めることができたと思います。



ソワレにてドイツ人の友人と

学校終了後は、私と同じレジデンスに住み、リアル第三大学で日本語を学ぶフランス人と親しくなり、彼を通して学校へ通っていた頃とは別に新たな友人の輪が広がりました。彼は、フランス領マルティニク島からリアルに日本語を学びに来ていたので、フランス国内で生まれたフランス人とはまた違う独特の文化を持っていました。私たちは、それぞれお互いの国に対して関心を持っていたので、私は彼に日本語や日本の文化、歴史を教え、彼は私にフランス語の様々な日常会話での言い回しやフランス政治、マルティニク島の文化を教えてくれました。それらは、私にとって日本を見直す良い機会となると同時に、フランス語の上達や新たな文化の吸収の機会にもなりました。

フランス留学を通して

国民の政治への関心が高いフランスで1年間、知識欲旺盛な留学生やフランス人たちとともに勉強できたことは、私にとって大きな刺激となったと思います。また、そのような環境での生活は、改めて私に日本の政治や国内問題への強い関心を抱かせるようにもなりました。そして、勉強だけでなく、様々な国々の友人との交流によっても多くの考え方や文化を学ぶことができたと思います。さらに、リアルでの日常生活において、問題が起こった時の対処の仕方や、日本とは異なる環境でいかに工夫して暮らせるかということに身をつけることができ、これらの経験を良い思い出とするだけでなく、今後の生活において何らかの形で生かしていければ良いと思っています。

最後に、このような貴重な機会を与えてくださった学校の方々に深く感謝を申し上げます。ありがとうございました。

ニューカッスル大学夏期語学研修に参加して

国際関係学部 国際言語文化学科2年 山田 陽子

私は、2007年の夏休みを利用して英国のNewcastle大学での語学研修に参加しました。長期の海外滞在の経験もない上に、英国ではテロもあったので、出発前は本当に研修をやり遂げられるのか、今年行くべきなのかとても悩みました。しかし、英国に行ってみると、日本を立つ前は長いと思っていた3週間はあっという間に過ぎていきました。

【戸惑いから始まった授業】

授業は、午前に2クラス、午後は週に3回、選択制のクラスがありました。1クラスは2～8人くらいの少人数で、とてもアクティブな授業でした。文法や語彙もただ覚えるだけでなく、すぐにクラスの中でゲームやペアワークを通じて実際に使う練習をしました。しかし、クラスメイトと私の語学力、特にスピーキングの力の差が大きく、彼らがとても流暢に英語を話すことに驚きと戸惑いを感じていました。彼らは次々と質問をし、時には先生と冗談を言って楽しんでいました。しかし、「ここではみんな生徒だから…」と言う友達の意見を聞いて、自分なりに授業を楽しめるようになりました。



ニューカッスルでの最後の授業、お世話になった先生と

【異文化を持つ友達】

私は、ドイツと韓国から来た友達と仲良くなりました。最初は、ネイティブのように話せる彼女たちに比べ、私の語学力は乏しいことが気になっていました。彼女たちだけでなく多くの生徒は、英語を話すことに何も問題を持っていないように見えるほど流暢に話していたのです。しかし、彼女たちは、一生懸命私の話を理解しようとしてくれました。おかげで、英語で会話することに慣れてくると、だんだん私も間違いを恐れずに積極的に話せるようになっていきました。さらに、彼女たちと一緒にいると、英語に対する心構えの違いに何度も驚かされました。例えば、私が、会話中に聞き慣れない単語を辞書で調べようとしたら、「辞書を使わないで!」と言われたことがありました。難しい単語があっても、簡単な単語で説明しようとする彼女たちの英語に対する熱心な気持ちに、私も見習わなければと痛感しました。

また、この語学研修の大きな魅力は、「様々な国の人とクラスメイトになれる」ということでした。実際に参加してみると、ドイツ、ポーランド、イタリア、スペイン、ギリシャ、サウジアラビア、カタール、台湾出身の人がいて、異文化を肌で感じる事ができました。私は、彼らと簡単な挨拶を教えあったり、私の名前を母国語の文字で書いてもらったりしました。また、浴衣に興味を持ってくれた友達には、日本から持参した浴衣を着付けてあげたり、

漢字やひらがなを教えたりもしました。特に、お互いの国の挨拶やマナーについての話で盛り上がり、彼らのストレートな意見は、私にとって自国の文化や言語について考えるきっかけにもなりました。

【International Evening】

研修を始めて2週間目の金曜日には、インターナショナルイブニングがありました。インターナショナルイブニングでは、劇や歌、



インターナショナルイブニングにて

楽器の演奏を披露したり、ゲームを楽しんだりしました。私は浴衣を着て参加し、何人かの人と一緒に折り紙を折りました。中国の友達も鶴を折ってくれましたが、彼女の折り方と私の折り方とが微妙に異なっていて興味深かったです。また、最後にみんなで踊ったドイツのダンスは、本当に楽しくて忘れられない思い出になりました。

【研修で学んだこと】

この3週間、英語でコミュニケーションをする楽しさを実感できたことが、Newcastleで私が得た一番の宝物だと思います。研修中、言いたいことが英語でうまく言えなくて悔しい思いをすることも多くありました。しかし、私の周りの人たちは、どんな時も諦めないで私の話に耳を傾け、拙い英語を理解しようとしてくれました。そんな優しさのおかげで私は、完璧な英語で話せなくても、コミュニケーションができるのだと感じることができました。

また、寮生活やインターナショナルイブニングなど授業以外の場面でも、異文化を肌で感じる事ができ、私にとって、語学研修で得た素晴らしい思い出の一つとなりました。ただ、逆に、日本の文化や社会事情を聞かれる機会も多く、興味を持ってもらっていることをうれしく思った反面、返す言葉に詰まってしまうことも多々ありました。そういう意味では、この語学研修は、自分たちの文化や社会について考えるきっかけにもなったと思います。

私の英語力は、まだまだ十分なものではありません。しかし、この3週間の研修をやり遂げられたことは、確かに私の自信になりました。今まで漠然と英語が好きだと思っていた気持ちが、研修に参加したことで、もっと英語を話せるようになりたいという強いものになりました。研修に行く前は迷いもありましたが、今は2年生の夏に挑戦して本当に良かったと思っています。終わりになりましたが、この研修を支えてくださった吉村先生をはじめとする皆様に、改めて心から感謝申し上げます。

オハイオ州立大学夏期語学研修に参加して

国際関係学部 国際関係学科1年 小野 直哉



県大生クラスの授業風景

今回、私は、7月28日から8月22日の期間、県立大学が国際交流協定を結んでいるアメリカのオハイオ州立大学の語学研修（SSEP）へ参加しました。以下に述べますとおり、私は、この研修期間を通じて、今まで経験したことのない貴重な体験をすることができました。

【異文化への対応】

長いフライトを終え、7月28日の夜、無事に大学の寮に到着した後、近くのコンビニでピザなどの冷凍食品を買って食べました。しかし、私を含め参加した仲間たちは、ほとんどみんな進んで食べようともしませんでした。一番の問題は、野菜がなかったことだけではなく、脂肪分が非常に多かったことです。それゆえに、これからの食生活が思いやられるとみんな悟りました。こういう生活が約1週間続きましたが、2週間目からは、現地の日本人の先生方が貸して下さった炊飯器を使って“米”を炊き、みんなで寄って食べました。やはり日本食は最高においしく感じたのと同時に、日本人であることを実感させられました。

【とても思い出深かったホームステイ】

私のホストファミリーは、何と未婚のおじいさん一人でした。最初にそのことを聞いた時は少し驚きましたが、実際に会ってみると、とても温厚な人で、又ジェントルマンでもありました。彼は、もう10年以上もホームステイを受け入れていたということだったので、私への対応も慣れていました。何かを説明する時にはとても分かりやすく、ゆっくり話してくれました。また、彼の家の周辺一帯は、コーン畑と大豆畑が果てしなく広がっていました。滞在中、彼は、私を様々な場所へ連れて行ってくれました。初日の夕食には、Amishという民族の料理があるレストランに行きました。その民族は未だに“電気”の存在を信じないそうです。そういった民族が今日でも存在していることに驚きを感じるとともに、さすがアメリカだなと感じました。また、飛行機などがたくさん展示されているエアフォースミュージアムや今、アメリカで人気のミニゴルフ、それから、私の最も印象に残った場所であるインディアンの野外劇が行われたXenia、これらの場所はどれも、忘れることのない素晴らしい思い出として私の記憶の中に刻まれました。

【オハイオでの生活を通じて】

オハイオでは、いろいろな場所に出かけました。基本的には、午前授業を受け、午後にはConversation partnerやその友達とともに、ダウンタウンや映画、スーパー、本屋、ショッピングモール、それから飲食店などに行きました。私にとって、行くところすべてが学びの場でした。例えば、物を買う時には、必然的に店員と接しなければなりません。すなわち、英語でコミュニケーションをしなければなりません。このことは、思っている以上に困難なことでもありました。実際、ファーストフード店に行っても自分の言っていることが通じなかったり、相手の言っていることがほとんど聞き取れないことがありました。その結果、頼んでいないものが出てきたり、ほしいものが手に入らないということがありました。こういった場面に直面すると、つくづく自分の英語力が弱いと思いました。しかし、不足していたのは、自分の英語力以上にコミュニケーション力だ



graduation ceremonyを終えて先生たちと

と実感しました。今回の研修は、3週間という短い期間でしたが、様々な所へ出かけ、多くの体験をすることができたため、かなり私のコミュニケーション力の向上に役立ったと思っています。そして、このコミュニケーション力は、プレゼンテーションを行う際などにも応用することができました。

【語学研修の効果】

私にとって、今回の大きな目的の一つでもあった英語力を向上させるという目的は、大方達成できたと感じています。現地での授業は、とても有意義に楽しく受けることができました。映画レポートや今ホットイシュー（話題）となっているアメリカにおけるマンガ、2008年に行われる大統領選挙などを題材にしたレクチャーなどもあり、とてもユニークな内容のものであったと思います。それから、最もこの研修で有益になったと思うことは、プレゼンテーションの基本的な方法論を身に付けられたことです。これに関連して、英語を話そうとする“自信”も得ることができました。この自信は、これから英語を学習していく上で、私の中でとても大きな支えに成り得ると考えています。

このように、今回の研修は、すべてが私にとって今まで経験したことのない貴重なものとなりました。そして、その背景には、研修で出会った一生涯忘れることのない素晴らしい仲間と現地の先生方、それから日本で出発の間際までお世話になった澤崎先生や諸先生方の存在がありました。この場を借りて、感謝申し上げたいと思います。ありがとうございました。

米国・カリフォルニア大学バークレー校と 大学間交流協定を締結

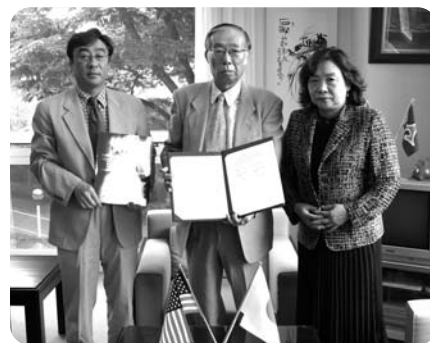
本学は、米国のカリフォルニア大学バークレー校（THE UNIVERSITY OF CALIFORNIA, BERKELEY ロバート・バージェノー総長）と全学的な教員及び学生の交流について協議を進めてきたところ、このたび協議が整ったため、大学間交流協定を締結しました。

本学と大学間交流協定を締結する大学等は、カリフォルニア大学バークレー校が14校目となります。

同校は、1868年に設立され、カリフォルニア大学群10校の中で最も古い歴史を持つ大学です。学生数は、学部生約24,000人、大学院生約10,000人を誇り、アメリカ国内はもとより、世界的にも認知度が高く、経済、ビジネス、心理学、コンピュータ、化学など、多くの分野が、毎年全米ランキングの上位5位以内に評価される実績を持っています。さらに、国際交流にも力を入れており、既に世界30カ国以上の大学と提携を結んでいます。

また、同校は、かねてより本学の国際関係学部と交流がありましたが、2006年4月、同校国際交流室長のジョン・リー博士が来日し、西垣学長らと会い、交流協定に関する話し合いがなされ、同年10月、西垣学長の命により、国際関係学部の中山慶子教授が同校へ赴き、ジョン・リー博士、ジム・リンカーン博士（ビジネススクール=Haas のDean）、ロバート・バージェノー総長に会い、大学間交流協定の合意に至ったものです。

なお、協定は、2007年5月8日に同校のロバート・バージェノー総長が署名を行い、郵便交換方式により、同年6月25日に本学の西垣学長が署名を行い、締結となりました。



サイエンスフェスティバル in “る・く・る2007” に参加して!

食品栄養科学部 食品生命科学科 助教 増田修一

8月18日（土）に静岡科学館“る・く・る”にて、青少年を対象とした「サイエンスフェスティバルin“る・く・る2007” 青少年のための科学の祭典第11回静岡大会」が行われ、食品栄養科学部より、増田、熊澤准教授、太田助教、栗山助教、伊藤助教、井上助教、また大学院修士課程修了生の奥田茜さんが実験講師として参加しました。

この科学の祭典は静岡県内の大学、高等専門学校、高校または団体が参加して、「青少年が科学の不思議さや楽しさを実感できるような実験や観察、科学的な工作等を行う」もので、今回は47の団体が出展を行いました。

大会は8月4、5、18、19日の4日間に行われ、我々は18日の3日目に参加しました。今回の大会の延べ参加人数は8月18日だけで3753名、4日間では1万4085名であり、多くの子供達が会場に来られました。

我々の出展実験テーマは、「ブドウジュースの色はなぜ変わるの?」であり、その内容は、一般家庭にある身近なもの（酸性またはアルカリ性物質：洗剤、酢、重曹等）をブドウジュースに加えて、赤紫色がどのように変化するかを観察するものです。この実験は子供達だけでなく、保護者の方にも好評で、我々のブースでは計134名の子供達が体験し、大変盛況でした。今回、多くの子供達に喜んでもらい、またそれを通して科学に興味を持ってもらうことができたため、来年度以降も是非参加したいと考えております。



実験指導中



サイエンスフェスティバルの講師メンバー

名誉教授の称号授与

辻 邦郎 先生（前薬学部・大学院薬学研究科教授）

辻 邦郎前教授は、昭和39年3月静岡薬科大学を卒業、昭和41年3月同大学・大学院薬学研究科修士課程を終了後、同大学院薬学研究科博士課程に進学、昭和42年3月博士課程を中退され、同年4月より静岡薬科大学薬剤製造学教室の助手に任用されました。その後、昭和54年4月より1年間は米国テキサス大学に客員研究員として留学され、帰国後、昭和55年4月に講師、昭和56年4月に助教授に昇任されました。昭和62年静岡県立大学開学後、平成2年4月に同大学薬学部教授（薬品資源学講座）に就任されました。

この間、各種委員会の委員及び委員長、静岡県立大学評議員、学長補佐、薬学部長、副学長を歴任され、40年間の長きに亘り、静岡薬科大学、静岡県立大学で研究、教育ならびに大学の発展に貢献されました。

研究面では、海洋天然物を初めとする天然物中の生物活性物質の研究を中心に多くの功績をあげられ、100編に近い原著論文、総説、著書にその成果を発表されました。特に静岡県沼津市で起きた貝中毒の原因物質であるネオスルガトキシンの単離・構造決定と貝の毒化機構の解明および食肉の加熱調理により生成する発癌物質、トリブP-1やP-2の発見など世界の研究者が注目する研究成果に対して、昭和52年と平成元年に知恩会斉藤奨励賞を、昭和59年には三島海雲記念財団学術奨励賞を受賞されました。

教育に関しては薬学概論、天然薬品学、応用天然物学、機器分離法等の学部講義、薬品資源学特論等の大学院の講義を担当され、薬品資源学の課題研究を通して学部生及び大学院生の教育に尽力されるとともに、後進の指導育成にあたられました。また、ニュージーランド・コースロン研究所フェロー、平成17年5月からは中国浙江省医学科学院客員教授として国際的な学術交流にもご尽力されました。

学外においては、日本薬学会、日本癌学会、日本化学会、日本水産学会、日本農芸化学会、和漢医学学会に所属され、日本薬学会評議員、薬学教育協議会常任委員、平成14年度日本薬学会東海支部長として学会の発展に尽くされました。加えて、静岡県海洋バイオテクノロジー推進協議会委員、しずおか産業創造機構技術評価委員、静岡県薬事審議会会長、静岡県病院薬剤師会顧問、ファルマバレープロジェクト第二次戦略検討委員会委員などを歴任され静岡県の科学技術の発展にご尽力されました。



園部 尚 先生（前薬学部・大学院薬学研究科教授）

園部 尚前教授は、東京大学薬学部卒業後同大学大学院薬学系研究科に進学し、昭和47年3月薬学博士号を取得、その後、山之内製薬(株)開発研究所に就職されました。翌年から2年間、米国ミシガン大学薬学部にてResearch Associateとして留学、帰国後は山之内製薬(株)製剤研究所の主任研究員として、昭和55年から5年間米国がん研究所（NCI）との共同研究を推進されました。同社において、DDS研究センター長、研開企画本部役員待遇ライセンス部長を歴任後、平成10年1月1日付けで静岡県立大学薬学部教授（薬品製造工学講座）に就任されました。

静岡県立大学においては、製剤学・薬剤学の講義を担当するかたわら、各種委員会の委員、学生部長、学長補佐、大学院薬学研究科主任、同選考長を歴任され、9年余にわたり本学における教育・研究に多大な貢献をされました。

研究面では、徐放性製剤およびナノ製剤に関する設計と試験法の研究を通じて製剤学・薬剤学の発展に極めて大きな貢献をされました。1997年以前の製薬企業に在職中には、カルシウム拮抗剤・塩酸ニカルジピンの徐放錠の研究開発に携わり、その成果は当時の欧米主要製薬企業（Syntex 及び Sandoz）に技術導出されて、国際的に高い評価を得ました。この評価を背景に、DDS研究センター長、研開企画本部役員待遇に遇せられ、さらには、これらの功績等により、企業内で2回功労賞を受賞されています。

1998年以降は静岡県立大学に移籍し、次世代型製剤であるナノ製剤の製造法と規格試験法の確立を研究テーマとし、国内における多数の学会発表に加え、国際学会においても、過去3年間で招待講演2件、一般発表14件に及び、活発な国際的学術活動を展開されました。その研究業績は、過去10年間で原著論文44報、著書6冊（共著）を数えます。特許に関しては、企業在籍中に14件、大学に移籍してからは3件の出願があり、新製剤技術の構築とその実用化を目標とする真摯な姿勢がうかがわれます。学会におけるこれらの業績により、平成19年度日本薬学会功績賞の受賞者に決定しています。

審議会委員等については、平成11年から5年間「薬剤師国家試験委員会委員」、平成15年から2年間「総務省日本学術会議医療薬学研究連絡委員会委員」を務めたほか、現在、「創薬等ヒューマンサイエンス総合研究事業評価専門家委員」、「日本薬局方調査会委員」、「知財高等裁判所専門委員」を務め、薬学教育・研究に大きな影響力を発揮されています。

学会活動としては、平成16年度および平成17年度の2年間日本薬学会の会長に選任されたほか、現在、日本PDA製薬学会副会長、(財)日本公定書協会理事、(財)永井記念薬学国際交流財団常務理事、日本DDS学会評議員として精力的に活動されています。



野澤 龍嗣 先生（前食品栄養科学部・大学院生活健康科学研究科教授）

野澤龍嗣前教授は、昭和44年3月東京大学大学院薬学研究科博士課程を修了され、大腸菌のナイアシン欠乏時のDNA複製に関する研究で学位を取得されました。文部省奨励研究生を経て、昭和45年1月からアメリカロックフェラー大学の助手として乳酸菌ヌクレアーゼの研究をされ、次いでコロラド大学医学センターで細胞培養技術を習得されました。昭和47年3月からは講師、昭和50年5月からは助教授として順天堂大学医学部細菌学教室に勤務されました。昭和63年4月から食品栄養科学部微生物学研究室教授として着任され、また平成3年4月からは大学院生活健康科学研究科食品栄養科学専攻の教授も兼任されました。

順天堂大学に在職中は、日米医学会コレラ部会に所属されて、東南アジアでのコレラ菌の野外調査や半年間に渉るヴァージニア大学医学部感染症部門での研修など、感染症のエキスパートとして活躍されました。また、新しく興ったエイズ患者に感染する結核菌に注目して、治療薬開発のためのアッセイ法などの開発も手がけられました。本学では、食細胞分化抗原および炎症蛋白としてのS100カルシウム結合蛋白（S100A8/A9）について研究されました。また、この蛋白が種々のヒト癌組織にも発現し、特に甲状腺癌や乳癌において病理学的悪性度と密接に関することを発見して、診断や治療への応用の途を開かれました。

学部での教育は、主として栄養学科の微生物学、免疫学などを担当され、その功績により平成18年度厚生労働大臣表彰を受けられました。大学院では生体防御特論を担当されました。

社会活動として、専門の細菌性食中毒・アレルギー・ピロリ菌感染・エイズなどについて公開講座・報道メディア・各種研修会などを通じて市民に講演・報告されました。

本学では、食品栄養科学専攻の副専攻長を2期4年、専攻長を2期4年、評議員を4期8年、また遺伝子組換え安全委員会委員長を務められました。さらに倫理委員長として、大学の研究不正行為防止規程とガイドラインの作成や倫理委員会が扱う事案の解決にご尽力されました。



赤石 壽美 先生（前国際関係学部・大学院国際関係学研究科教授）

赤石壽美前教授は、昭和39年学習院大学政経学部政治学科を卒業され、株式会社旺文社勤務の後、早稲田大学大学院法学研究科修士課程に進まれ、昭和44年3月法学修士の学位を授与されました。その後同研究科博士課程を昭和50年3月満期退学されて、同年4月静岡女子大学文学部講師に着任され、昭和52年同助教授、昭和62年静岡県立大学国際関係学部教授、平成8年同大学院国際関係学研究科教授兼務となりました。

この間、各種委員会の委員、静岡県立大学評議員を歴任され、32年間の長きに亘り、静岡女子大学、静岡県立大学で研究、教育ならびに大学の発展に貢献されました。

研究面では、専門分野である家族法、日本法制史および社会保障法に関し数多くの研究成果を発表されましたが、とくにわが国の窮民救助立法史、現行公的扶助制度の法的分析において多大の業績を挙げておられます。また『近代日本法律司法年表』、『判例体系（第二期版・民法総則）』の編集をはじめ、学界の共通財産となるべき資料、年表などの刊行にも力を注がれましたが、とりわけその刊行の全期間にわたり、資料の蒐集、整理編成等、刊行の中心的作業に従事された『明治前期家族法資料』（全11冊）は、日本学士院賞を受賞するなど、学界からきわめて高い評価を受けました。

教育面では、全学共通科目、国際関係学部における現代社会研究、国際行動学特殊研究、演習、大学院における現代社会研究等の科目を担当され、基礎教養教育から大学院教育まで、幅広くかつ充実した内容によって学部学生・大学院生への丁寧な指導を實踐されて後進の育成指導にあたられ、顕著な教育成果を挙げられました。

また大学運営に関しては、本学発足時の学内規定の整備作業にその中心メンバーとして参画され、評議員としては国際関係学部（教養科）教授会の運営に尽力されましたが、とくに本学教養教育の改革ならびに教養科改組の難局に当たられ、現在の教養教育体制の構築に際し多くの貢献をされました。さらに地域社会への貢献についても積極的に取り組み、静岡県所管学校への永年の出講のほか、自治研修所において県職員等への教育、研修にも努められ、静岡県地方労働委員会委員として健全な労使関係の維持確保に努力された功により平成7年には会長表彰を、そして県政の推進への功績により平成12年には静岡県知事表彰を受賞されました。



高木 桂蔵 先生（前国際関係学部・大学院国際関係学研究科教授）

高木桂蔵前教授は、昭和41年早稲田大学政治経済学部政治学科を卒業され、その後、香港中文大学大学院新亜研究所で学ばれました。昭和44年、東京プレスセンターに入社されると同時に文筆業に従事され、昭和48年には中小企業事業団海外投資アドバイザーにもなられました。昭和62年に静岡県立大学国際関係学部に着任されました。平成3年、同大学院国際関係学研究科教授兼務となられ、退職まで20年間にわたり本学での教育と研究に従事されました。

本学在籍中の研究面では、専門分野である華僑論を中心に数多くの成果を発表されましたが、とくに客家人を中心とした華僑史において多くの業績をあげておられます。そのひとつである『客家——中国のなかの異邦人』（講談社現代新書、1995年）は日本文芸大賞を受賞されております。また、異文化理解に関する研究、日本と東アジアの歴史観と民族性の比較研究、静岡県内に残るお茶を中心とした民謡・童歌・唱歌の収集復元も行ってこられました。

教育面では、歴史と文化（全学共通科目）、華僑論、現代東南アジア論、原典購読、演習の各科目を学部および大学院で担当されました。学部学生・大学院生への適切な指導を实践されたばかりか、多くの社会人聴講生も受け入れ、顕著な教育成果をあげられました。開学当初は留学生の日本語教育にもご尽力いただきました。

大学運営に関しては、留学生を含めた本学学部生と院生のための返済不要の民間奨学金制度の整備に奔走されたことが顕著なものとしてあげられます。県内企業などから募ったその金額は膨大で、多大な貢献をされました。平成11年3月には、「奨学金制度の充実に寄与した」との事由により当時の星猛学長より「はばたき賞」（平成10年度）を授与されました。本学教員個人が同賞を受けた事例はこんにちにいたってもこれが唯一であります。また県民向けの公開型の本学教員による講座を県内市町村と手がけられ、各自治体の生涯学習担当者などからも賞賛されました。学内誌『はばたき』には19年間もの間、「谷田風土記」を連載し、教職員への郷土理解を深めたばかりか、地域の町内会からも注目されました。その他の地域社会への貢献についても積極的に取り組み、静岡県地域づくりアドバイザー、静岡県国際化推進懇話会会長、生涯学習審議会委員、ボーイスカウト第42団（ハンデイスカウト）副団長、骨髄バンク静岡県広報委員、小学校学校協議会委員など幅広く活動されました。



寺尾 良保 先生（前環境科学研究所・大学院生活健康科学研究科教授）

寺尾良保前教授は、昭和40年3月静岡薬科大学卒業、昭和42年3月同大学院薬学研究科修士課程を修了し、同年4月静岡薬科大学助手（薬品製造化学研究室）に採用され、昭和59年7月静岡薬科大学講師に任用されました。平成3年4月に静岡県立大学大学院生活健康科学研究科が新設されるにあたり、同研究科環境物質科学専攻の助教授に任用され、平成10年4月環境科学研究所動態化学研究室教授（大学院生活健康科学研究科兼務）に就任されました。この間、環境物質科学専攻の副専攻長と専攻長、環境科学研究所長及び各種委員会の委員を歴任され、大学の発展に貢献されました。

静岡薬科大学及び静岡県立大学薬学部在籍中は、合成化学の研究を行うとともに、薬品製造化学に係わる講義の担当及び学部学生及び大学院生の教育、研究指導に従事されました。その間、昭和53年4月から1年余米国スティーブンス工科大学に留学し、β-ラクタム及びステロイドの合成について研究されました。合成化学分野の研究では、ケイ素原子の特性を利用した1,3-双極子環状付加反応、並びに酸素機能を活用した光学活性化化合物の合成法の開発に顕著な研究成果を挙げられ、国内外の著名な学会誌に掲載されました。環境科学分野に移行後は、環境化学Ⅱ特論、次いで動態化学特論等の講義を担当されるとともに、多くの大学院生の研究指導に従事されました。研究面では、化学的手法を駆使した環境汚染物質の解明に努められ、環境ガン・変異原物質、内分泌攪乱化学物質（環境ホルモン）、塩素処理副生成物に関する多くの顕著な研究成果を挙げられ、特に河川水中の変異原物質に関する研究では、米国化学会の環境関連雑誌に掲載され高い評価を得ています。また、21世紀COE事業推進担当者、厚生労働省がん研究班員としても活躍されました。学会活動では、日本薬学会、有機合成化学協会、日本環境科学会、日本癌学会、日本環境変異原学会（評議員）、日本水処理生物学会、日本環境化学会等の会員として幅広く活躍され、静岡県立大学で行われた国際学会や定例会では、実行委員として多大な貢献をされました。さらに、平成17年4月には環境科学研究所付置「地域環境啓発センター」を立ち上げ、研究所の重要な業務である環境啓発活動を統合し、静岡県研究機関との連帯の強化発展や地域貢献にご尽力されました。



図書館だより

図書館では、親しみやすく魅力ある図書館運営をめざし、各種事業を行ってまいりました。今回はその様子の一部を御紹介します。

図書館では、6月に所蔵資料の探し方や利用方法を紹介する「図書・雑誌の探し方講座」や、データベースや電子ジャーナルの使い方について紹介する、「雑誌論文の探し方講座」を行いました。それぞれの講座は大変盛況で、各研究室やゼミ単位での講習会申込も受け付けました。また、7月には静岡県主催の「静岡県看護教員養成講座」の受講生や県立総合病院の薬剤師の方々からの要請による、図書館資料の利用の仕方や、「医学中央雑誌」、「pub-Med」などのデータベースの検索講習会を行い、学内外の皆様にも広く図書館を活用していただくことができました。



講習会風景

6月22日(金)は夏至です。

夏至の時間が1年のうち一番長い日です。静岡の日の出は4:33ごろ、日没は19:03ごろです。日没後も夕暮れの明かりを楽しむことができます。そこで、大学の周辺を歩いてみませんか。本を探ることができるのは明るい夜が残っています。図書館では、「夏至」に関する歴史・歳時記・天文学・文学などの本を集めてみました。フィリピンではもともと夏至は夏至の夜に行なわれていました。子どもの頃読んだ、「ムーン」(トニー・ヤンソン著)に出てくるニコロニコロは、夏至の前後に寝かれない種から生まれます。また、「夏の夜の夢」(シェイクスピア著)は夏至の日の出来事といわれています。知っていましたか?【学芸書】のタイトルがはってある本以外は貸出できません。図書館にはこれ以外にも資料があります。探してみてください。



「面白くなければ図書館じゃない!」を合言葉に、6月の夏至の日、身体運動科学研究室と学生のワンダーフォーゲル部が企画した、「夏至の暮れ残りWALKING」に図書館も協賛して、夏至にちなんだ天文学や暦、民俗学の資料や、関連する文学作品などの資料を展示・紹介しました。



キャンパスツアー資料展示・紹介風景

8月には、キャンパスツアーやオープンキャンパスにあわせて、「県立大学創立20周年記念」と題して、県立大学の歩みや大学発行の図書や紀要、新聞の切り抜きなどの資料を展示して、多くの方々に県立大学の活動の様子を紹介することができました。

図書館では、これからもさまざまな手法で図書館の魅力を紹介し、図書館の資料を広く利用・活用していただけるような企画を計画したいと考えています。

シリーズ 『私の1冊の本』

図書館では、「私の1冊の本」と題して、先生方が今までに読んで、感動し心に残った本をシリーズで紹介しています。紹介された図書は県立大学附属図書館の書架に配架してありますので、まだ読んでいない方は是非この機会に読んでみてください。また、すでに読んだことがある方には、あらためて読み直してみることをお勧めします。以前読んだときの思い出が呼び覚まされたり、あるいはこれまで読んだ時とは違った新たな感動がみなさんの心に響くことと思います。

坂田昌弘 環境科学研究所 教授

紹介図書名: 『旅人—ある物理学者の回想—』

(角川文庫1883)

著者名: 湯川秀樹

出版社名: 角川書店

ISBN: 4-04-123801-3

図書館所蔵: 閲覧室1階 289.1/Y97



2007年は、湯川秀樹博士の生誕100周年に当たる。博士は、1949年に「中間子理論」によって日本人初のノーベル賞(物理学賞)に輝いたが、戦争で荒廃した人々の心に勇気と希望を与えたことから、その受賞には、現在とは比較にならないほど大きな価値があったと思われる。しかも、頭脳だけを頼りに、紙と鉛筆だけで成し遂げられたことは、見事としか言いようがない。

本書は博士が生まれてから、中間子論に到達するまでの27年数ヶ月の間に起こった様々な出来事と、それに対するその時々の博士自身の反応についての記録である。博士の淡々とした瞑想感を漂わせる文章には、文筆家としても類まれな才能を感じる。私は本書を大学生の頃に読んだと思うが、後一步まで行きながら、なかなか「中間子」の概念へと飛躍ができず悶々とする姿など、科学者としての生き様に深い感銘を受けたことを記憶している。しかし、今回この一文を書くに当って読み返してみると、上記以外にも、子供の才能を見抜く母親や教師の重要性を記した箇所にも強い感動を覚えた。その箇所を以下に紹介する。

博士は、「孤独で我執の強い人間」と自身を語っている。事実、子供の頃から口数が少なく、面倒なことは全て「言わん」の一言で済ましたため、「イワンちゃん」というあだ名が付けられたほどであった。父親（小川琢治、有名な地理学者で当時京大教授）は、5人の子供全

てを学者にしたいと思っていたのだが、余りに内向的な性格から、秀樹には別の生き方、すなわち大学に進学せずに専門学校にでも行かせた方が良くのではないかとの考えがよぎった。しかし、相談をもちかけられた母親は毅然として、「目立たない子もあるものです。目立つ子や才気走った子がすぐれた仕事をする人間になるというわけでは御座いますまい。それに、どの子にも同じようにしてやりたいと存じます。不公平なことは出来ません」と強く反論した。さらに、同じく相談を受けた中学校（京都一中）の校長は、琢治の問いかけを真っ向から否定し、秀樹の飛び抜けた数学の才能とその将来性を保証した。

その他にも、本書には、子供の進路を決める上で学校教育における教師の役割がいかに大切であるかが述べられている。現在、学校教育や教師のあり方が問われ、政府の教育再生会議等で議論されているが、この方面においても本書は含蓄に富んだ書と言える。

岩倉さやか 国際関係学部・国際言語文化学科 講師

紹介図書名：『草枕』（岩波文庫 緑31）

著者名：夏目漱石

出版社名：岩波書店

ISBN：4-00-310104-9

図書館所蔵：閲覧室2階 学生文庫 岩文緑/10/4

子供の頃から、この頭もなければ尻尾もないような小説がなぜかお気に入りでした。小学生の頃『草枕』に出会って以来、気持ちを落ち着かせたいときには、この本を開いて、心の調律めいたことをするのが十数年来の習慣になっています。その意味では、私にとってこれ以上く私の一冊と呼ぶに相応しい本はありません。



『草枕』は岩波文庫以外にもたくさん所蔵しています。

那古井の温泉場にやってきた画工の「余」は、逗留先で那美さんという美しい出戻りの女性に出遭います。本作品を紹介するのに、これ以上の説明を付け加えるのは難しい。というよりもむしろ、筋を説明して、要約してしまうことを拒むような性格が、この小説にはあります。

だからこそ、開く頁はどこでも構わない。全部で十三章から成る本書は、そのすべてが、詩句を一つ一つ継いでいったような濃密な文章で構成されていて、どの場面、どの言い回しを取っても、彫琢されつくした美の世界が、すっきりと、明瞭に立ち上がってきます。能「高砂」のツレに生き写しの茶店の婆さん。床屋の主人と余との軽妙な会話。青磁の器から生まれ出たような練羊羹の心地よい色彩。振袖を着た那美さんの立ち姿。小説は筋なんかどうでもいい、「御簀を引くやうに、ぱつと開けて、開いた所を、漫然と読んでるのが面白い」のだ、という

余の言葉がありますが、私自身、余の提唱する読みに倣って、この「美を生命とする俳句の小説」の世界を飽かず逍遥してきました。

しかしやはり、この美しい世界の軸となって作品全体を支えているのは、「ある因果の細い糸」で繋がれた、余と那美さんの「非人情」的な間柄にあるのだろうと思います。作中では、これは普通の男女の関係ではない、恋や愛といった境界とは無縁だという断りがくり返し述べられます。にもかかわらず、読後の頭に常に漂うのは、『草枕』に描かれたこの両者の関係こそが、男と女とが築き得る、もっとも美しい在り方なのだろう、というほんやりとした感慨でした。

そう思わせられる一番の原因は、余の職業を、「見る」ことにおいて特権的な「画工」に設定した作者の巧緻さにあるのでしょうか。「見る」という行為は、見る者、見られる者との距離を否定なく示すものであると同時に、眼差しを受けた者を射抜き、把握するものでもあります。離れながら、繋がる。この見る、見られるの間柄が、「非人情」——「人情に非ず」という否定的表現の隠し持つ豊かさを、残りなく表しているのではないかと思うのです。

振り返れば、私が「美しさ」ということを考えるとき、意識の底にはいつも、『草枕』のあらゆる文章が、揺るぎ無い規範として厳然と存在していました。私がこれから踏み出す一歩は、果たして美しいのか、否か。日常の、小さな岐れ路の一つ一つで、余の言葉を、那美さんの所作を、想起し、見つめ、そうすることで実は見守られ、自ずと次の一歩が定まってゆく、そういうことをくり返してきました。踏み迷うことの多いこの世で、心から頼り頼むことのできる道標を得られたことは幸福であったと、いま改めて思うのです。

受賞

■平成19年度日本生薬学会学術貢献賞を受賞

対象課題「天然薬物の生合成工学に関する研究」

この賞は、生薬学の学術振興に寄与し、50歳未満で、世界的にも注目される発展性のある研究者に授与されます。薬学部 阿部郁朗講師は、天然物分子多様性の起源の解明と有用物質生産を2つの柱とした、「生合成工学」ともいべき新しい学問領域の開拓を目指しています。これが、生物多様性の追求と有機化学の合体により、知の統合としての生薬学を先端科学として具現化しようとする試みと評価され、平成19年9月14日に表彰されました。5年前の学術奨励賞に続く受賞となります。



阿部郁朗講師

■平成19年度日本食品科学工学会奨励賞を受賞

食品栄養科学部の熊澤茂則准教授は、平成19年度日本食品科学工学会奨励賞を受賞しました。同賞は、食品科学工学の分野において、優れた研究をなし、今後更に発展が期待される優秀な業績をあげた45歳以下の研究者に授与されるものです。平成19年9月6日～8日に中村学園大学(福岡)で開催された日本食品科学工学会第54回大会にて授賞式が行われました。受賞の対象となった研究は、「植物ポリフェノールの機能解析を目的とした分析化学的研究」であり、MS(質量分析)やNMR(核磁気共鳴)などの分析手法によって植物ポリフェノールの機能を化学的に解明した研究内容が、高い評価を受けました。



熊澤茂則准教授

■平成19年度クリタ水・環境科学研究“優秀賞”を受賞

(財)クリタ水・環境科学振興財団(KWEF)は、平成19年度より、「クリタ水・環境科学研究優秀賞」を新設しました。この賞は、KWEF研究助成事業の助成研究者の中で、優秀な研究成果を創出し、社会貢献度の高い活動を行っている研究者を顕彰するものです。第1回目の本年度は、平成14～16年度の助成研究者を対象に5名が選出されました。岩堀恵祐教授(環境科学研究所長)は平成15年度自然科学の一般研究助成者からただ一人選ばれました。

授賞式は平成19年8月31日(金)で、新宿の京王プラザホテルで行われました。KWEFネットワーク委員会の鈴木基之委員長(東京大学名誉教授)より表彰楯と副賞を授与された後、岩堀教授は、「嫌気性微生物による *cis*-1,2-ジクロロエチレン(*cis*-DCE)およびビニルクロライド(VC)の分解」と題した研究成果の概要を発表しました。



岩堀恵祐教授

■平成19年度生態工学会賞(学術賞)を受賞

環境科学研究所 谷晃准教授は、平成19年度生態工学会賞(学術賞)を受賞しました。同賞は、長年の生態工学に関する優れた学術研究に贈られる賞であり、生態工学会で最高に荣誉ある賞と位置づけられています。受賞タイトルは、『植物と大気微量気体交換に関する生態工学的研究』であり、植物が栽培される人工環境および野外の生態系からなる自然環境下で、大気中の微量気体の挙動に着目して研究成果を積み重ねてきたことが評価されました。特に、植物からのテルペン類放出の特性や動態の解明では、最新の分析機器である陽子移動反応質量分析計(PTR-MS)を用い、国際的に評価される研究成果を蓄積してきました。



谷晃准教授

■DICOMO2007ヤングリサーチャー賞を受賞

大学院経営情報学研究科修士課程2年の張正義君と吉田雄紀君の両名(湯瀬研究室所属)が平成19年7月6日にDICOMO2007ヤングリサーチャー賞を受賞しました。DICOMOヤングリサーチャー賞とは、日本の情報処理分野の代表的な学会の一つである情報処理学会の9つの研究会主催の「マルチメディア、分散、協調とモバイル」シンポジウムにおいて優秀なプレゼンテーションを行った若手の研究者に贈られる賞です。張正義君の「携帯電話を用いたユニバーサルな安否情報登録システムの開発」と吉田雄紀君の「加速度情報を用いた常時携帯型機器の地震識別に関する研究」のプレゼンテーションが優秀なものと認められ、2名が受賞しました。



張正義君と吉田雄紀君
(湯瀬准教授と)

研究助成採択

平成19年度 ノバルティス研究奨励金

研究者：代表 薬学部 教授 菅 敏幸 研究課題：「ヘテロ元素含有多環式天然物の合成」

平成19年度 内閣府沖縄イノベーション創出事業(事業化ステージ)

研究者：サブテーマ代表 食品栄養科学部 准教授 熊澤茂則

研究分担者 食品栄養科学部 教授 中山勉

研究分担者 食品栄養科学部 助教 石井剛志

研究分担者 環境科学研究所 教授 下位香代子

研究分担者 環境科学研究所 助教 榊原啓之

研究課題：「沖縄の野生植物資源を利用した機能性素材の開発」

平成19年度 静岡市産学交流センター・「地域課題に係る産学共同研究委託事業」

研究者：食品栄養科学部 准教授 市川陽子

研究課題：「フードサービス産業におけるヘルシーメニューを介した新しい栄養教育システムの開発」

平成19年度 財団法人生命保険文化センター「生命保険に関する研究助成」

研究者：経営情報学部 助教 上野雄史
研究課題：「保険契約の会計基準に関する経済的影響の予測－日米欧の比較を通じて－」

平成19年度 財団法人かんぽ財団「調査研究助成」

研究者：経営情報学部 助教 上野雄史
研究課題：「(株)かんぽ生命保険の株式上場への障壁－保険契約の会計基準の適用を巡って－」

平成19年度 財団法人クリタ水・環境科学振興財団研究助成

研究者：環境科学研究所 准教授 牧野正和
研究課題：「有機リン殺虫剤の光変換生成物に起因する新たな環境影響の評価」

平成19年度 科学技術振興機構ターゲットタンパク研究

研究者：代表 岩田 想 (京都大学大学院医学研究科教授)
研究分担者 薬学部 教授 菅 敏幸
研究課題：B-37「創薬に繋がるV-ATPaseの構造、機能の解明」

平成19年度科学研究費補助金追加採択された研究代表者及び研究課題

若手研究 (スタートアップ)			
井川貴詞	薬学部	助教	多置換芳香族ポロン酸誘導体の新規合成法の開発
海野雄加	薬学部	助教	乳がん由来株化細胞を用いたレプチン機能の阻害化合物の探索とその作用機序の解明

特別研究員奨励費 (外国人特別研究員)			
阿部郁朗	薬学部	講師	外国人特別研究員：SHI,S.、研究課題名：生成酵素を用いた非天然型新規化合物ライブラリーの構築

継続課題の研究代表者 特別研究員奨励費 岩崎有作 (生活健康科学研究科 DC2)

教員の人事

採用者

(9月1日付)
経営情報学部・教授 松浦 博
食品栄養科学部・助教 三好規之
(10月1日付)
経営情報学部・講師 いじのりなお 伊集守直

退職者

(8月31日付)
生活健康科学研究科・教授 山口正義
看護学部・教授 門脇千恵
看護学部・准教授 落合富美江
環境科学研究所・助教 宮田直幸

(9月30日付)

看護学部・教授 永井洋子
食品栄養科学部・助教 森安裕二

客員教授の紹介

川北 博 公認会計士 (7月1日称号付与)
小川 浩 (財)日本環境整備教育センター調査研究部主幹 (9月1日称号付与)

★こどもと楽しむママサイエンス『紫外線ががちり学ぼう!』

環境科学研究所の地域環境啓発センターでは、7月21日(土)に、静岡新聞社・静岡放送「静岡かがく特捜隊」との共催事業として、こどもと楽しむママサイエンス『紫外線ががちり学ぼう!』を当研究所で開催しました。17組35人の親子が参加し、紫外線の健康への影響などを学んだほか、さまざまな実験に挑戦しました。講師は光環境生命科学研究室の伊吹裕子准教授と豊岡達士助教が務めました。

センサーを使って紫外線の強度を測定したり、ブラックライトを使って光るものを探すなど、親子で楽しみながら多彩な実験を行い、特に、暗闇で蛍光物質が幻想的に光る現象は多くの子供たちを魅了しました。また、保護者の方には紫外線の子供への影響に関する講義を行いました。



暗闇で光る様子



グループに分かれて実験

★『静岡かがく特捜隊・光と風の夏祭り』に出展

静岡新聞社・静岡放送「静岡かがく特捜隊」のメインイベントで、親子で楽しみながら「科学」を体験し、学ぶ「光と風の夏祭り」が8月25日(土)と26日(日)の両日、袋井市愛野のエコパアリーナで行われました。

環境科学研究所の地域環境啓発センターでは、本イベントの協力者として、『太陽光に含まれる紫外線について学ぼう』というテーマで出展し、日光写真やブラックライトを使用した各種実験を通じて、紫外線の性質について学んでもらいました。イベントは大変な盛況ぶり、両日あわせて約14,000人の参加者がありました。



■夏休みの行事

“夏休みファーマカレッジ2007”開催 体験してみよう!「薬をめざす生命科学」

県内高校生を対象とした「ファーマカレッジ」は、本年度で9年目となり、夏休み期間中の8月9日、10日の2日間で開催されました。

大学の最先端の研究に用いられている設備と、普段、高校生が手に触れることがないような機器を使用して、最新の知識と技術にふれながら、薬学の世界を体験する機会を提供しました。

例年、多くの参加希望者があり、本年も選考により、32名に参加してもらい、「自分のDNAを鑑定してみよう」など数名ずつ、7つの体験テーマに分かれ、教員や大学院生の手ほどきを受けながら課題研究に取り組みました。更に、研究発表、総合討論と交流会を通じて、薬学に対する興味や理解を深めてもらいました。



課題研究「リンパ組織を見てみよう」



課題研究「抗エイズ薬をつくろう」

環境問題に関するいろいろな実験に親子で挑戦! 夏休み親子環境教室

環境科学研究所の地域環境啓発センターでは、県民の環境問題に対する意識の向上を目的として、8月4日(土)に「夏休み親子環境教室」を開催しました。

47人の小学生がその保護者の方と参加し、「水の測定と浄化に挑戦しよう!」「空気について学ぼう!」「資源・エネルギーを考えよう!」「身の回りの生き物と光を学ぼう!」「汚れを落とす仕組みと環境について考えよう」の5つのテーマに沿って11の実験を体験しながら、親子で一緒に環境問題について考え、驚いたり、感心したり楽しい一日を過ごしました。



実験の様子



参加者全員でハイ!ポーズ

なお、今年度は、静岡新聞社・静岡放送が実施している「静岡かがく特捜隊」とタイアップして実施しました。新聞紙上での告知から1時間半で定員オーバーとなり、環境問題に対する関心の高さが感じられました。

「実際に実験を行うことで、実験および環境科学研究の楽しさに触れてみよう!」 環境科学研究所・サマースクール 2007

環境科学研究所では、「実際に実験を行うことで、実験および環境科学研究の楽しさに触れてみよう!」をテーマに、8月9日(木)と10日(金)の2日間に亘って、大学での環境研究に興味のある高校生以上の県民の方々を対象に、「環境科学研究所・サマースクール2007」を開催しました。

今年度は、11の課題を掲げ、高校生を中心に12名の参加があり、最先端の設備を使用した実験を体験していただきました。



実際に計測機器を操作



測定結果をまとめる

■グローバルミュージカル

外国人と日本人の子どもたちが歌う!踊る!演じる! “グローバルミュージカル”

みなさん “こんにちは”、“ポーアタールジ”、“アンニョンハセヨ”。

私たちは静岡県立大学国際関係学部津富ゼミ4期生です。津富ゼミは、国際的視野に立ち、地に足のついた社会貢献を企画、実行することを目的として活動してきました。ここ静岡県には多くの外国人の方々が住んでいますが、私たちは日本人と外国の方が交流する機会が少なく感じ、日本人の子どもたちと外国人の子どもたちが交流する場を作りたいと考えました。そこで企画したのはブラジル、朝鮮、日本の3カ国の子どもたちが歌って踊って演じるミュージカル、『グローバルミュージカル』です。

子どもたちが、お互いの文化や価値観を尊重し、認め合える仲間になってもらえたらという思いだけで始めましたが、ゼミ生は全員ミュージカルに関して素人です。けれども、想いに共感して頂けるスタッフが集まり、毎週土曜日に子どもたちと稽古を重ねていきました。

子どもたちも、最初は文化や言葉の違いからなかなか打ち解けあうことができませんでした。ゼミ生がどうすれば自然に交流が生まれるのか頭を悩ませていたとき、突然子どもたちが休憩中に鬼ごっこを始めました。言葉も通じないのに、一緒に笑いながら走り回っているのです。目と目が合う、笑い合う、鬼ごっこがしたくなる、そんな些細なきっかけさえあればよかったのです。最初に言葉の壁を破ったのは鬼ごっこでした。それから稽古やゼミ生が企画したゲームを通じ、また公演という一つの目標を共有することでどんどん絆が深くなっていきました。

2007年7月29日静岡芸術劇場、本番。出演する子どもたちの楽屋に、もはや国の壁は見当たりませんでした。

開演してからも、3カ国語で伸び伸び演技をする子どもたち、最後みんなで協力して踊るダンスでは、会場から大きな拍手をもらい、出演者21人が本当に楽しそうに踊ってくれました。舞台を大成功させ泣いている子どもたち、それは仲間と一つのことをやり遂げた達成感からかもしれません。

グローバルミュージカルは終わってしまいましたが、蒔いた種が実を付け花を咲かすのはこれからだと思います。このミュージカルが、出演した子どもたち、見に来てくださったお客様にとって、多文化共生が叫ばれるここ静岡で国際交流をする小さなきっかけとなれば、いろんな国の笑顔という花を咲かせることができると信じています。

国や文化が違うことはとっても楽しいことで、友達に国境はまったく関係ないと、3カ国の子どもたちが教えてくれました。これも大学が練習会場や倉庫などを貸してくださり、温かく見守ってくださったおかげです。

(国際関係学部 津富ゼミ4期生 土屋勇人)



3カ国21人の仲間たち



本番中の子どもたち

■ 本学教員の著書紹介

「メタボリック症候群と栄養」

幸書房 全258頁 2007年7月20日刊行 定価3,600円
食品栄養科学部 教授 横越英彦 編

厚生労働省は、2008年から健康診断に「メタボリック症候群（シンドローム）」（内臓脂肪症候群）の考え方を導入し、40歳以上に腹囲、血清尿酸値を測定するなどの内臓脂肪型肥満に着目した検診および保健指導を義務づけた。このことは日本のメタボリック症候群予備群の深刻さを裏付けている。有症者と予備群あわせて1960万人といわれるその数は一向に減る様子はなく、将来の生活習慣病による医療費増大の潜在的要因となっている。

本書は、こうした状況を踏まえ、メタボリック症候群の生理の解明と栄養学的アプローチにより、潜在的予備群の顕在化を防ぎ、各種疾患への機能的食品の効果的利用とエネルギー代謝を考えた適切な運動の意義を検討した。

メタボリック症候群は、子供の時からの運動不足や生活習慣による代謝の変動が、徐々にドミノのように拡大していったものである。そこで本書は、栄養と病態に関する基礎研究を行っている方の新たな研究指針づくりに貢献するのみならず、子供の食育や食習慣に関心のある方、栄養療法に関心のある医師、臨床栄養に携わる管理栄養士、また、自分のお腹の脂肪と健康を気にしている多くの方達に利用していただければ幸いである。



「ウェブサイエンス入門 —インターネットの構造を解き明かす—」

NTT出版 全184頁 2007年9月4日刊行 定価1,900円
経営情報学部 教授 斉藤和巳

パソコンとインターネットの飛躍的な普及により、科学技術論文や最新ニュースの検索などをはじめとし、情報収集の効率などが飛躍的に向上している現状で、このようなサービスや仕組みを支え発展させるのに、ワールド・ワイド・ウェブは重要な役割を果たしている。

ウェブサイエンスとは、大規模かつ複雑で時間とともに絶えず変化するウェブの基本構造や成長規則さらには情報伝播メカニズムなどを数理モデルとして解明することにより、インターネット上に散在する莫大な情報を知識源として有効利用したり、将来の社会傾向を予測したりすることなどを目的とした研究である。

本書は入門編として、ウェブネットワークの可視化など、いくつかの研究事例を取り上げ、実証実験を土台にしつつそれらの分かり易い紹介と解説を試みたもので、コンピュータや数学そしてウェブに関心のある学生や一般の方々、理学系や工学系の仕事、あるいは科学研究に携わっている方々を幅広く読者層として想定している。



■ クラブ・サークル紹介

GOLD ROWDIES

食品栄養学部 栄養学科2年 伊藤 望



開学記念行事にて

私たちGOLD ROWDIESは、チアの楽しさをみんなに伝えよう!と結成して3年目の今年、サークルから部に昇格することができ、さらに活動に励んでいます。活動としては、さまざまなイベントに参加したり、都市対抗野球大会チームのチアリーダーとして応援させて頂いたり、色々な方のおかげで昔の私たちでは考えられない程活動の幅を広げることができています。中でも大学行事での出演、学校の仲間を応援できることにとても喜びを感じています。

今年も新メンバーを迎え、さらなる技術向上のために練習に励んでいます。夏には高校生を含む多くのチームとの合同合宿に参加し、技術はもちろん、チアリーダーにとって必要なこと「チアスピリット」を学び、肌で感じてきました。私たちはそういったことも生かしながらチーム一丸となって、日々チアリーダーとして成長していきたいと思っています。

大学の部活だからできること、チアが大好きなROWDIESだからできること。私たちにとってそれは大切なことです。個性が強かったり、先輩後輩仲が良かったり・・・そこから作り出されるダンスは私たちにしか表現できません。

長期休暇中には毎日のように会う仲間、会わない時間が長くなると寂しくなるくらいにチームが大好きなROWDIESは、みんなでUNITYなチームを目指し、さらに皆さんに楽しんで頂けるように頑張ります!学内、学外ともに出演することがありましたら、見に来てくださると嬉しいです。応援よろしくお祈りします。 GOLD ROWDIES!!!



夏のイベントで

● ● ● ● ● ● ● 学内ニュース「はばたき」への寄稿を大歓迎! ● ● ● ● ● ● ●

教職員・大学院生の皆様の受賞、研究助成への採択、学会・研究集会の案内、クラブ・サークル活動報告、ボランティア活動などの寄稿をお待ちしています。大歓迎します。

教育研究推進部・広報室（管理棟3階）あてにお願いします。E-mail: koho@u-shizuoka-ken.ac.jp

企画・編集：静岡県立大学広報委員会（事務局 TEL 054-264-5130）

静岡県立大学ホームページアドレス：<http://www.u-shizuoka-ken.ac.jp>